

梅林古墳

—市営住宅建設に伴う飯倉H遺跡の調査—

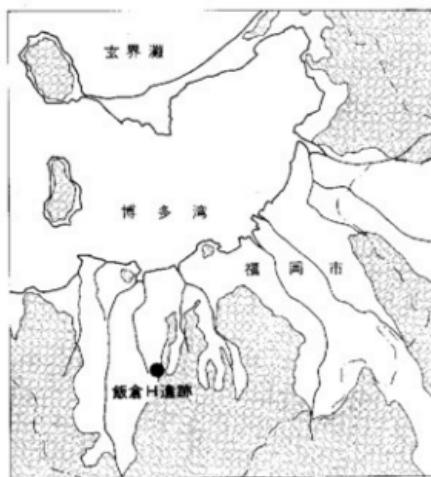
福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集

1991

福岡市教育委員会

梅林古墳

A Study of the Umebayashi Kofun



遺跡略号 I K R-H
調査番号 8914

1991

福岡市教育委員会

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY



1. 飯倉H遺跡周辺遠景（西油山から・中央が遺跡）



2. 梅林古墳全景（北から）

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されてきました。それらを保護し後世に伝えていくことは、云うまでもなく我々の務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は、城南区の市営梅林第一団地の建設に伴い、平成元年度に発掘した飯倉H遺跡の調査成果を報告するものです。幸いなことに関係各位のご指導とご協力により、梅林古墳は当初の計画を変更し、現地で保存、整備されることになりました。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご利用頂ければ幸いに存します。

最後に、発掘調査、梅林古墳の保存、また本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

Umebayashi Kofun

The Umebayashi kofun, which has been discovered at 5-chome Umebayashi Jonan-ku, Fukuoka city, is a key-hole shaped tomb. It is 27m long and 3m high. In the chamber-room, Sue wares, Haji wares, iron arrow-heads, chisel, knives, ornaments of the saddle, harness of horse, and jewelry have been discovered.

This kofun dates to the second half of the 5th century and will be a good specimen to understand the history of chieftains' tombs in the Sawara Plain.

例　　言

1. 本書は福岡市建築局による市営梅林第一団地の建設に伴い、福岡市教育委員会が平成元（1989）年5月10日から8月19日に発掘を実施した飯倉（いいくら）II遺跡の報告である。
1. 本遺跡は1979年発行の福岡市文化財地図に登記されていなかったため、新たに飯倉II遺跡と命名し、そのなかの前方後円墳を梅林古墳とした。
1. 本書に掲載した遺構、遺物の実測・製図は濱石哲也、菅波正人、林田憲三、小川秀樹があたった。製図は撫養久美子、濱石正子、入江のり子によるところが大きい。
1. 遺構、遺物の写真撮影は濱石、菅波が行った。遺構の空中写真は柳澤ト大塚による。
1. 本報告書作成にあたっては西島信枝、前田みゆき、山田由美子、太田順子、上田保子、緒方まさよ、有島美江、藤信子の協力を得た。
1. 遺構図に用いた方位は磁北である。
1. 本報告に関する図面、写真、遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
1. 本書の執筆は濱石、菅波、林田が分担した。
1. 梅林古墳の保存整備については柳田純孝埋蔵文化財課課長に、また出土鉄滓の金属学的調査については大澤正巳先生に原稿をいただき、付論として掲載することができた。
1. 本書の編集は濱石、菅波、林田が行った。

本文目次

	本文頁
1はじめ	1
2遺跡の立地と周辺の歴史的環境	3
1) 遺跡の立地	3
2) 周辺の遺跡	3
3) 西油山周辺の古墳	6
3調査の概要	11
4梅林古墳の調査	13
1) 立地と調査前の状況	13
2) 墳丘	13
3) 横穴式石室	18
4) 遺物の出土状況	19
5) 出土遺物	21
6) その他の出土遺物	30
5A、B区の調査	32
1) 調査の概要	32
2) 繊維墓	32
3) 積穴住居跡	35
4) 上坑	37
6まとめ	38
1) 墳丘について	38
2) 石室について	38
3) 古墳の年代	39
4) 早良平野の古墳時代	41
付論1梅林古墳の保存と復元工事	45
付論2梅林前方後円墳古墳出土鉄滓の金属学的調査	47

図版目次

卷頭	1 飯倉II遺跡周辺遠景（西油山から）	2 梅林古墳全景（北から）
図版1	飯倉II遺跡周辺航空写真（1980年頃）	
図版2	1 飯倉II遺跡周辺遠景（西油山から）	2 梅林古墳調査前状況（東から）
図版3	梅林古墳墳丘遺存状況 1 北上空から	2 西上空から
図版4	梅林古墳墳丘遺存状況 1 東上空から	2 東から
図版5	1 梅林古墳西くびれ部（北から）	2 梅林古墳墳丘土層（Aトレンチ）
図版6	梅林古墳石室遺存状況 1 上空から	2 東から
図版7	1 梅林古墳石室奥壁	2 梅林古墳石室玄門
図版8	梅林古墳石室奥壁 1 北隅	2 南隅
図版9	1 梅林古墳石室閉塞	2 梅林古墳石室前庭
図版10	梅林古墳石室遺物出土状況 1 奥壁部	2 奥壁部鉄斧

- 図版11 梅林古墳石室遺物出土状況 1 北袖部 2 北袖部軸金具
 図版12 1 A区全景(南から) 2 B区全景(南から)
 図版13 1 A区腰棺墓出土状況(南から) 2 A区S X02腰棺墓
 図版14 1 A区S X03腰棺墓 2 A区S C01住居跡
 図版15 1 B区S K01土坑 2 B区S K02土坑
 図版16 出土遺物I
 図版17 出土遺物II
 図版18 出土遺物III
 図版19 出土遺物IV
 図版20 保存整備された梅林古墳 1 西から 2 南から

挿図目次

本文頁

第1図	周辺の遺跡	2
第2図	坂倉丘遺跡周辺	4
第3図	坂倉丘遺跡調査区図	10
第4図	梅林古墳調査現況図	12
第5図	梅林古墳墳丘遺存図	14
第6図	梅林古墳墳丘土層断面図	16
第7図	梅林古墳くびれ部遺物出土状況図	17
第8図	梅林古墳横穴式石室図	(17-18間折込)
第9図	梅林古墳横穴式石室内遺物出土状況図	20
第10図	梅林古墳出土遺物実測図I	23
第11図	梅林古墳出土遺物実測図II	24
第12図	梅林古墳出土遺物実測図III	26
第13図	梅林古墳出土遺物実測図IV	28
第14図	梅林古墳出土遺物実測図V	29
第15図	梅林古墳出土遺物実測図VI	31
第16図	A、B区構造配置図	(32-33間折込)
第17図	S X01・02腰棺墓、S X01・02腰棺実測図	33
第18図	S X03腰棺墓、腰棺実測図	34
第19図	S C01住居跡、出土遺物実測図	36
第20図	S K01・02土坑実測図	37
第21図	梅林古墳墳丘復元図	38
第22図	梅林古墳石室平面全図	39

表目次

本文頁

第1表	墳丘規模	15
第2表	早良平野の主な古墳	43

1 はじめに

近年来福岡市の人団は増加の一途をたどり、それに伴う宅地化は郊外へとおよびつつある。と同時に既存住宅の建て替え、高層化が進んでいる。

1988年、城南区梅林の市営野萩台団地（新名称は梅林第一団地）の建て替えにあたり、市建築局から埋蔵文化財課に、当該地の埋蔵文化財の有無について照会があった。1979年発行の文化財分布地図には遺跡としてのマークはなかったが、分布調査時すでに宅地化されており十分な探査を行っていないこと、また対象面積が広くかつ当初の住宅が木造建てで地下深くまで破壊されていないことなどから、試掘調査により改めて遺跡の有無を確認することにした。

試掘調査は1988年に行われ、油山から北に延びる尾根筋に1基の古墳と2ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。そこで埋蔵文化財課は建築局と協議をもち、諸事情から発掘調査による記録保存との結論を得た。調査に先立って対象地をA、B、Cの3地点に分け、1989年5月10日A区の表土剥ぎから調査を開始した。そして梅雨と酷暑のなか同年8月19日に終了した。調査面積は古墳を含め1700m²となった。なお調査に先立って本遺跡を飯倉H遺跡、またその中の古墳を梅林古墳と命名した。^④

調査途中、梅林古墳が小型の前方後円墳であることが判明し、建築局と協議の結果、計画変更して現地保存および公園として整備されることになった。これは1990年12月に整備を終え、現在公園として公開されている（付論1参照）。また調査が終わりに近づいた8月6日には現地説明会を開催し、地元のみならず県内外の約300人の参集をみた。

発掘調査および整理、報告書作成までの関係者は以下のとおりである。

調査委託 福岡市建築局管理部住宅計画課

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係

課長 柳田純孝 係長 飛高憲雄 務務 中山昭則 松延好文

調査・整理担当 濱石哲也 菅波正人

調査・整理補助 林田憲二（西南大学講師）

調査および梅林古墳の保存にあたっては建築局住宅計画課、教育委員会用地計画課のご協力をいただいた。また発掘は有山古太氏をはじめとする作業員の方々のご協力で行った。記して感謝の意を表する。（濱石）

註) 1971年発刊の「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表－総集編－」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集）に梅林に所在する野萩台古墳（円墳、径7m）の記載がある。野萩台という団地名称を用いているものの、添付の地図をみると限りでは梅林古墳とは位置が異なり、別の古墳と考えていた。しかしその後、福岡大学歴史研究部の研究報告（仲田善則「駄ケ原・霧ヶ瀧地区における表探遺物」七隈第20号、1983）で、この古墳が梅林古墳と同位置になっている事を知った。あるいはこのふたつは同一古墳であり、当初の野萩台古墳の名称を用いるべきかも知れないが、前方後円墳の形態をとるこの地域の首長墳であることからあえて大字名を用いた梅林古墳の名称をそのままにした。



第1図 周辺の遺跡 (1/5万)

1. 梅林古墳
2. 拝辱古墳
3. 稲渡古墳
4. 京ノ隈古墳
5. 御松寺御陵
6. 柏原A 2号墳
7. 豊留石棺墓
8. 宮の前C 1号墳
9. 小戸古墳
10. 景靈寺古墳
11. 五島山古墳群
12. 高峰古墳群
13. コノリ古墳群
14. 野方古墳群
15. 野方勤進古墳群
16. 羽根戸古墳群
17. 羽根戸南古墳群
18. 斎盛古墳群
19. 金武古墳群
20. 西山古墳群
21. 黒塚古墳群
22. 黒塔古墳群
23. 白塔古墳群
24. 長峰古墳群
25. (大石古墳群)
26. 荒平古墳群
27. 三郎丸古墳群
28. 豊留古墳群
29. 山崎古墳群
30. 西油山古墳群
31. 霧ヶ滝古墳群
32. 影冢古墳群
33. 驚ヶ原古墳群
34. 大谷古墳群
35. 七隈古墳群
36. 犬瀬戸古墳群
37. 早苗田古墳群
38. 烏越古墳群
39. 漏戸口古墳群
40. 東油山古墳群
41. 柏原古墳群
42. 干隈古墳群
43. 瓢倉古墳群
44. 藤崎方形周溝墓群
45. 有田古墳群
46. 原古墳群
47. 豊留方形周溝墓群
48. 西新町遺跡
49. 有田遺跡
50. 田村遺跡
51. 四箇遺跡
52. 岩本中原遺跡
53. 野方中原遺跡

2 遺跡の立地と周辺の歴史的環境

1) 遺跡の立地

県の西北部に位置する福岡市は北を博多湾、東から南にかけて三郡、背振山地に連られた福岡平野の大半を占めている。この広義の福岡平野は、さきの山地などから延びる丘陵や山塊により分断され、東から柏原、福岡、早良、糸島（今宿）の小平野を形成している。これらの平野は遅くとも弥生時代には地域的なまとまりをみせ、後には郡として区別されるようになる。考古学的にもこれらの平野を一地域としてとらえ、その中の発展過程、また他平野との関りを論ずることが多い。

このうち市西南部に広がる早良平野は、背振山地から延びる山塊、丘陵を隔て東の福岡平野、西の糸島平野にはさまれ、南は佐賀県との境をなす背振山地に隣まれている。この背振山地に源を発する室見川が平野のやや西寄りを北流し、博多湾へとそそぐ。平野内には第三紀丘陵、洪積台地が点在し、また北辺には砂丘が形成されているが、その多くが室見川などを中心とした大小河川による沖積地となっている。

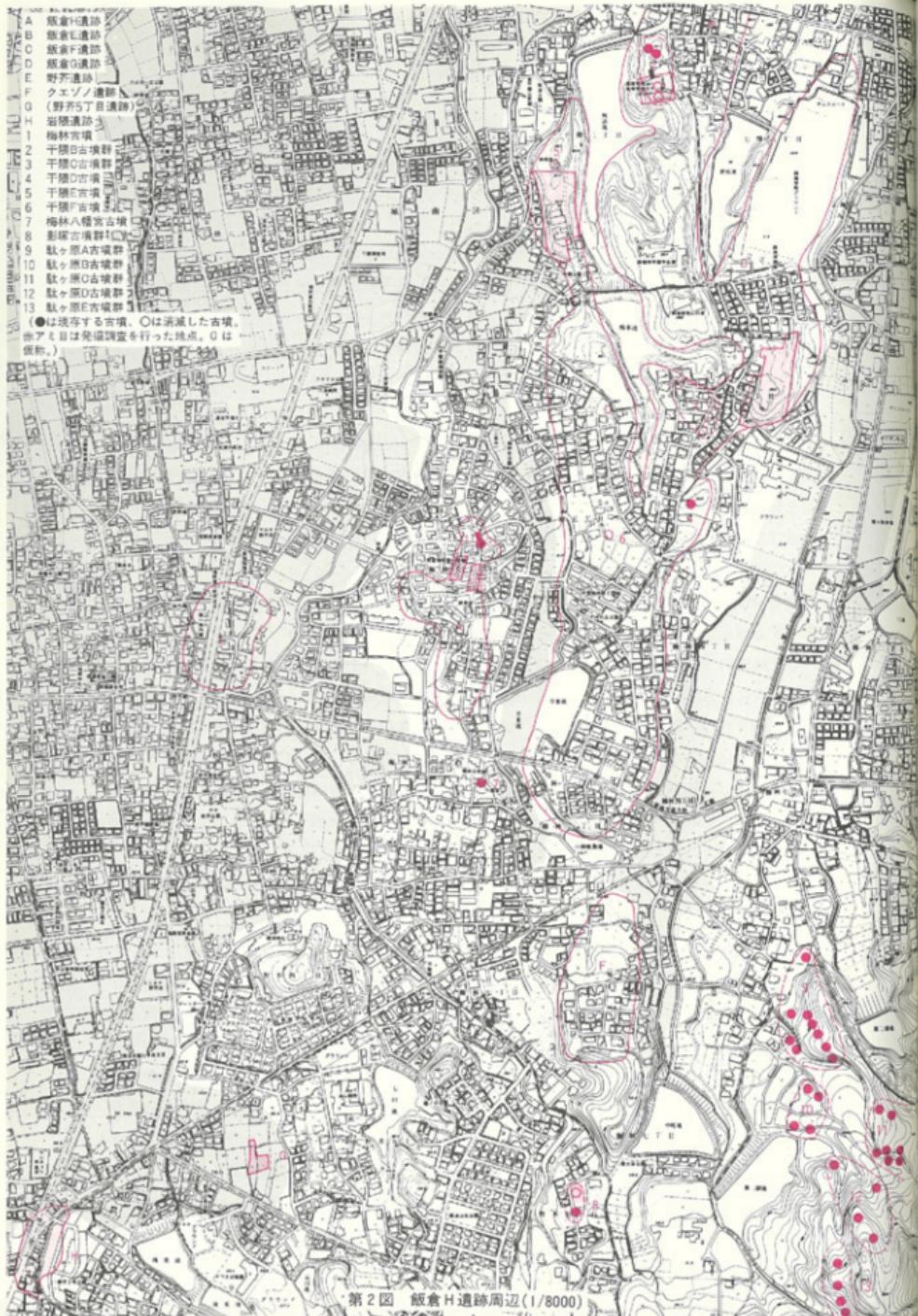
飯倉H遺跡（梅林古墳）はこの平野の東縁中央部、背振山系に属する油山（標高592m）から派生する標高27~32mの丘陵尾根上に立地する。この丘陵は、油山からハツ手状に北へ延びている丘陵群のうち西北部に位置し、早良平野に短く突きでている。梅林古墳はこの丘陵の尾根先端部分に、A、B区は古墳の南側部分にある。古墳頂に立つと、西に飯盛山から長垂の山地に囲まれた早良平野が広く望まれ、また北には博多湾に能古島、志賀島が重なりあって浮かぶ。東には小さな谷をはさみ下限・飯倉丘陵が北方向に延び、南は油山が縁濃くそびえている。行政的には福岡県福岡市城南区梅林5丁目であり、国土地理院発行の5万分の1地図「福岡」の南から9.5cm、西から19.3cm付近にあたる。梅林は古くは梅橋ともいい、古代にあっては能解郷に属していたものと考えられる。

調査前A、B地点は宅地、C地点（梅林古墳）は宅地と道路にはさまれた小高い丘となっていた。

2) 周辺の遺跡

早良平野では藤崎、西新町、五島山など海岸部の遺跡が古くから知られていたが、本格的な発掘調査が開始されたのは1967年の有田遺跡からといえよう。これは福岡市の都市化が西南部に波及したことによるもので、以後宅地開発、道路建設、学校建設、区画整理、さらには園場整備などに伴う行政発掘が間を置く事なく現在まで行われている。その結果先土器時代から近世にいたる多くの遺跡が確認され、同時に膨大な資料も蓄積されている。しかしそれとひきかえに調査後の遺跡のほとんどが消滅を余儀なくされている。

飯倉H遺跡の所在する早良平野東縁部では、それを墓と認識するか否かは別として、古墳が



多いことが、江戸時代に編まれた貝原益軒の『筑前国統風上記』³⁾に記されている。

「野芥村には石窟廿五ヶ所あり。國俗鬼塚と云。穴の入口はせばく、奥は広し。皆南に向へり。左右及び向の正面三方皆大石をたたむ。上は大石をならへ、天井の如し。」

「(七隈原には) 古き塚多し。窟あり。」

「西油山には鬼塚とて石窟廿許あり。其内横一間、奥に入事三間、口ひきく、奥の高さ七尺許有。又入事五間許なるもあり。」

「沼が原と云所あり。古塚多し。」

これらの記述からすると、西油山周辺で多くの古墳が認められていたこと、またその一部は横穴式石室が開口していたことがうかがえる。その後もこの地域に古墳が多いことは大正時代に編まれた『早良郡志』⁴⁾にもみえる。しかし福岡市教育委員会による本格的な遺跡分布調査が開始されたのは1968年であり、それとほぼ時期を同じくして、開発に伴う緊急発掘調査が始まる变成了。この間、福岡大学歴史研究部による油山周辺古墳群の分布調査、現状調査が行われている。⁵⁾ 1979年には福岡市教育委員会による詳細な文化財分布地図が刊行されるに至っているが、調査件数は千眼・飯倉丘陵を中心に増加する傾向にある。これまでの発掘あるいは分布調査によりこの地域の先土器時代から中世までの遺跡が知られるようになった。⁶⁾

先土器時代の明確な造構あるいは包含層の検出例はまだないが、五ヶ村池遺跡、飯倉E(千眼能添古墳)⁷⁾ 遺跡からナイフ型石器の出土を見ている。

縄文時代では五ヶ村池遺跡と七隈第8号古墳墳丘から前期の曾畠式土器が出土しており、他に飯倉E(熊ソイ) 遺跡、G(梅林七夕) 遺跡、クエゾノ遺跡などがあげられる。最近では重留古墳群の調査時に、D1号墳から前期の土器が、C2号墳から後期の土器が出土している。⁸⁾ 宝見川東岸では田村遺跡で早期から晩期、四箇遺跡で前期から晩期にいたる遺構あるいは遺物が確認されている。後期末から晩期にかけては遺跡が早良平野のはば全体に拡大する傾向があるが、現在のところ梅林周辺にはその分布はほとんど確認されていない。

弥生時代になると遺跡は丘陵の全体に広がる。しかしその当初は平野部に立地する遺跡が多く、重留遺跡では前期初頭からの集落跡や墓地、また田村遺跡では前期初頭の墓地がみられるが、平野東縁部では1963年に飯倉遺跡で調査された前期末の墓地が最も古いものである。この調査では前期末から中期にかけての甕棺墓数基が確認され、そのなかの金海式甕棺墓から細形銅劍の出土を見ている。また梅林の西南の岩隈遺跡からは甕棺墓、土壙墓が70基余検出されているが、甕棺は金海式以降中期末までのものであり、やはり弥生初頭に遡るものはない。⁹⁾ 1979年の飯倉E遺跡(千眼遺跡)¹⁰⁾ の調査では33基の後期の土壙墓群が検出され、また1988年の飯倉G遺跡では後期の木棺墓、石蓋土壙墓、土壙墓各々1基が確認され、木棺墓からは小型仿製青銅鏡、鉄刀子が検出されている。平野部や宝見川西岸部の遺跡とはその量、質とも違いが認められる。その地形に左右されたものであろうか。

古墳時代は先にみてきたように油山山麓の群集墳が目につくが、これは次の項で述べることとし、この時代の集落についてみていく。最近になって飯倉丘陵での調査例が多くなっている。²⁰⁾ 飯倉F遺跡では前期の住居跡が10基、飯倉C遺跡では後期の住居跡と土坑、また飯倉G遺跡では後期の住居跡が9基と建物、土坑などが確認されている。山麓裾にあたる野芥5丁目の遺跡でも後期の住居跡4基が確認されている。平野部にあっては田村遺跡、²¹⁾ 四箇遺跡などで前期の水利施設やそれらに伴う前期から後期の遺物が認められるが、明確な集落跡はない。ところがこの数年来行われている重畠から東入部にかけての圃場整備地内の調査で、前期の集落跡の検出例が増加している。

古代から中世の遺跡も平野部で確認されたものが多い。田村遺跡では11世紀から14世紀にかけての集落跡、重留遺跡でも奈良から中世にかけての集落跡が確認されている。千隈丘陵では能添池周辺を中心に古代から中世にかけての製鉄跡が古くから知られていた。飯倉G遺跡では平安時代の鍛冶炉²²⁾が調査により確認され、同時に土壌 sondage なども検出している。飯倉F遺跡では奈良時代の14基の住居跡、飯倉C遺跡では奈良時代から中世の15棟の掘立柱建物が検出されている。また飯倉E（千隈）遺跡では中世末の火葬墓14基が調査されている。今回調査した飯倉H遺跡でも、地元の人が定形の龍泉窯系青磁碗を採集しており、中世の墓地の類があったことをうかがわせる。古代末から中世のこの付近は野芥荘に比定されているが、遺跡はやはり平野部にその中心を置いているようである。

3) 西油山周辺の古墳

油山山麓の古墳群は、梅林の東端、現在福岡大学のグランドとなった七隈古墳群ののる丘陵を境に東と西に分けられる。西側の古墳群はおよそ早良平野に面し、東側の古墳は樋井川流域のふところ部分に位置しているといえよう。これは後の比伊郷と野芥郷の境とも考えられている。西麓の古墳群を南から北へ見ていくと荒平古墳群、三郎丸古墳群、重留古墳群、山崎古墳群、西油山古墳群、霧ヶ滝古墳群、影塚古墳群、駄ヶ原古墳群、大谷古墳群がある。また油山から北に延びる丘陵上には飯倉古墳群、千隈古墳群、七隈古墳群とともに今回検出した梅林古墳、その南側の梅林八幡古墳の単独墳がある。重留古墳群に面した平野の縁には坪塚古墳および方墳が知られている。『筑前国続風上記』にも見えるように古くから開口していた古墳が多く、また盜掘、石材採取などにより原形をとどめない古墳も相当数ある。以下、この西麓の古墳群を簡単に見ていくが、小群、基數、古墳名称などは主に1979年の分布地図によっている。今後の調査いかんによっては名称の変更、基數の増減があるものと考えられる。

荒平古墳群 早良平野の南、荒平山の西麓線に築かれた12群31基の古墳からなる。いずれも円墳と考えられるが未調査。密集の度合は少ない。東入部、岩本などの平野部の遺跡と向かい合う。古墳群の南には樋木谷古墳が1基ある。

三郎丸古墳群 荒平古墳群の北側、北から入り込む谷周辺の丘陵上にある。1979年の分布地

國作成時期には7群17基が知られ、うち4基は消滅していた。1980年、C～F群が團地造成により調査され、その際新たに9基の古墳が発見された。小群は報告のない現在とらえ難いが、古墳群全体としては26基となる。調査された古墳は17基、いずれも横穴式石室をもつ円墳で、7世紀代のものとされる。うち2基は破壊を免れているが、残存する古墳は7基に過ぎない。

重留古墳群 三郎丸古墳群と谷をはさんだ北側にある7群28基の古墳からなる。A 1号墳、²⁴⁾ C 1号墳、²⁵⁾ C 2号墳、D 1号墳が調査されているが、いずれも6世紀後半から7世紀の古墳である。B群とC群の間には鳥文鏡を出した重留箱式石棺墓（前期古墳か）。古墳群の基数には入っていない。）がある。また6世紀前半の須恵器窯である重留古窯跡がC 2号墳の調査時に検出されている。西の平野部には拝塚、重留遺跡群がある。

拝塚古墳 古くから円墳として知られていたが、墳丘は1949年の開田によって失われていた。²⁶⁾ 1988年発掘調査が行われ、主体部は残存していないものの、周溝と葺石の一部から、全長75m、後円部径45m、前方部幅31mの前方後円墳であることが判明した。周溝には8ヶ所陸橋がみられ、前方部は中央付近で方形状に張り出す類例をみない形態を呈している。墳丘1段目の一帯には埴輪をめぐらせており、埴輪には円筒、壺形、朝顔形、家形、圓形、桶、瓶、草摺、武人などがある。他に祭祀に用いられた土師器、周溝内出土の木製品などがある。5世紀前後の築造、中頃までには追葬が終えたものと考えられている。この古墳の前方部前面には、一辺40mの方墳が確認されている。また拝塚古墳の周辺では方形周溝墓群の検出もなされている。

山崎古墳群 重留古墳群と谷をはさんで東北の丘陵にある2群10基の古墳からなる。1974年に全古墳の調査が行われ、その後破壊され現在残る古墳はない。いずれも横穴式石室をもつ円墳で、うち2基の石室は竪穴系横口式系統上にあるものとされる。6世紀中葉から7世紀後半までの存続期間が求められる。他に7世紀初頭とされる火葬墓が検出されている。

霧ヶ滝古墳群 山崎古墳群と谷をはさんだ東側にある。3群57基と密集の度合が高い。1976年の福岡大学歴史研究部の45基の分布調査によれば、径5～10mの円墳で構成され、横穴式石室をもち、開口部は谷に向くものが多い。発掘調査を経た古墳はない。

西油山古墳群 山崎古墳群と霧ヶ滝古墳群の間を南に通る谷の東西斜面を中心に分布する9群41基からなる。古墳の密度は高く、またこれ以外にも開墾のために破壊された古墳があつたものと考えられている。開口したものには方形プランなどの横穴式石室がみられる。

影塚古墳群 霧ヶ滝古墳群の北に位置する独立丘陵上の2基の古墳からなる。1号墳が調査され、2号墳は石室の実測がなされている。ともに径15m前後の円墳で、横穴式石室をもつ。6世紀末から7世紀初頭の古墳と考えられている。

駄ケ原古墳群 霧ヶ滝古墳群の東北、油山山麓から梅林に向かう谷の尾根あるいは西斜面上に築造された8群53基からなる。最も北に位置するA 9号墳（タカバニ塚）が標高38m、最も南のH 1号墳が標高170mと古墳群内でかなりの高低差をもち、各小群は立地、特徴などにより

独自の墓域を形成しているとされる。福岡大学歴史研究部による分布調査の他、1970年F群の3基の石室調査がなされている。この際の出土遺物からF群の営まれた年代は6世紀末から8世紀初めと考えられている。

大谷古墳群 駄ヶ原古墳群の東側、油山北端山麓に位置する11基の円墳からなる。1～7号墳の7基が³²⁾調査されている。3号墳が竪穴式石室で6世紀後半、残りの6基は横穴式石室で、1、5号墳が6世紀末から7世紀、他は7世紀代の築造年代が考えられている。なお未調査の8～10号墳も横穴式石室を主体部としている。

千隈古墳群 千隈丘陵上に位置する5群13基からなる。宅地化に伴い分布調査以前に消滅した古墳が多い。これまでにA3号墳(千隈古墳)³³⁾、B1号墳、B2号墳の3基が調査されている。A2号墳は箱式石棺を主体部とした径24m、高さ3.6mの円墳である。主体部からの出土遺物は玉類だけであったが、墳丘出土の土器および主体部構造から4世紀後半から5世紀初頭の年代観が与えられている。B1号墳は径10m、主体部は2基の竪穴系横口式の系統のものである。出土遺物から5世紀末から6世紀後半頃までの存続期間が考えられている。B4号墳は小石室を主体部とするものであるが、墳丘は明確でなかった。副葬の須恵器から6世紀末から7世紀初頭の所産とされる。

飯倉古墳群 千隈古墳群と同一の丘陵の北側に点在する6群7基からなる。うち3基はすでに破壊されている。残りは未調査。D群だけは近接した2基の古墳からなるが、他は単独墳で、古墳間の距離もかなりあるなどこれまでみてきた古墳群とは様相が異なる。しかしこの付近は早くから宅地化が進んでおり、破壊された古墳が他にもあった可能性がある。

七隈古墳群 千隈古墳群と谷をはさんだ東側の丘陵にある8基の古墳群。油山周辺の古墳では最も早く調査されたが、8基のうち5基は調査前に破壊された。調査されたのはいずれも円墳で、5号墳は径16m、6号墳は径22m、8号墳は径10mをはかる。主体部は5号墳が不明、残りは横穴式石室であった。3基のなかでは5、6号墳が6世紀中葉に築造され、8号墳は7世紀代に築造されたと考えられている。

梅林八幡宮古墳 梅林古墳ののる丘陵の南側根元にある。1971年の地名表では径7mの円墳とある。現在かなり破壊され、墳形も定かではない。

以上油山西麓の古墳群を中心にみてきたが、山麓にある古墳群と丘陵部にある古墳とはかなり様相が異なるようである。丘陵部の古墳はどちらかといえば点在的であり、年代的にも4世紀から5世紀に築造された古墳を含んでいる。山麓の古墳群は密集の度合が高く、またその築造は6世紀後半から爆発的に起こっている。しかし一方では丘陵部の古墳群にあっても7世紀代まで存続する古墳があり、一概に丘陵部から山麓への墓域の移動という図式は描き難い。未調査古墳の多いなか即断はできないが、山麓部の古墳群は新たな契機によって、それまでの在地権力集團とは違った集團の墓域として築造された可能性もある。これは石室形態、出土遺物

などにより今後検証されるべき問題のひとつであろう。(濱石)

- 註) 1 烏田寅次郎「藤崎の石棺」「五島山の石棺」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯 1925
鏡山猛・永倉松男「筑前国福岡市発見の甕棺」考古学第1巻5・6号 1930
2 九州大学考古学研究室(編)『有田古代遺跡発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1967
3 貝原篤信(益軒)『筑前國統風土記』 1717(宝永6年)
4 福岡県早良郡役所『早良郡志』 1923
5 福岡市教育委員会『埋蔵文化財調査地名表第1集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第6集 1969
福岡市教育委員会『埋蔵文化財調査地名表総集編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971
6 福岡大学歴史研究部『駄ノ原古墳群・露ヶ窪古墳群分布調査概報』1976
福岡大学歴史研究部考古学班『鳥越古墳群現状調査報告書』1977
福岡大学歴史研究部考古学班『早苗田・鳥越古墳群現状調査報告書』1985
7 福岡市教育委員会『福岡市文化財分布地図(西部I)』1979
8 井澤洋一(編)『千隈熊添古墳』熊添古墳調査全 1985
9 福岡市教育委員会『鳥越・七隈古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第121集 1985
10 1989年調査。荒牧玄行氏の御教示による。
11 福岡市教育委員会『重留C群第1号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集 1983
12 福岡市教育委員会『高柳遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981
福岡市教育委員会『田村遺跡I~VII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第89+104+167+168+188+200+216集 1982~
1990
13 福岡市教育委員会『西園周辺遺跡調査報告書(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977
福岡市教育委員会『西園周辺遺跡調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978
福岡市教育委員会『西園周辺遺跡調査報告書(4)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1981
福岡市教育委員会『西園周辺遺跡調査報告書(5)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 1983
福岡市教育委員会『西園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 1987
福岡市教育委員会『西園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集 1989
14 福岡市教育委員会『入部I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990
15 森貞次郎「板倉の櫛棺と銅劍」「有田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集 1968
16 1985年調査。佐藤一郎氏御教示。
17 井澤洋一(編)『千隈遺跡』千隈遺跡調査全 1985
18 横山邦継「板倉G遺跡第1次」福岡市埋蔵文化財年報 Vol.3 1990
19 1989、1990年調査。宮井晋朗氏御教示。
20 1989年調査。山崎龍雄氏御教示。
21 訂20および1990年調査。長家伸氏御教示。
22 1990年調査。松村道博氏御教示。
23 施林古墳現地説明会の際、地元の方が手裡の土師器とともに持参。現在福岡市博物館に寄贈。
24 調査担当の二宮忠司氏御教示。
25 定森秀夫(編)『重留古墳群A群第1号墳』附岡田法入古代学協会 1984
26 福岡市教育委員会『重留遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988
27 森貞次郎・佐野一『重留石棺式石棺』『有田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集 1968
28 大川清「山崎古墳群」「福岡平野の歴史―緊急発報された遺跡と遺物―」福岡市歴史資料館図録第2集 1977
29 福岡大学歴史研究部『駄ノ原古墳群・露ヶ窪古墳群分布調査概報』付 西山古墳』 1976
30 福岡市教育委員会『影塚第1号墳発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集 1972
31 真野和夫「駄ケ原古墳群」「倉瀬戸古墳群」倉瀬戸古墳群調査团 1973
32 福岡市教育委員会『大谷古墳群I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集 1972
福岡市教育委員会『大谷古墳群II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第122集 1985

図3 飯倉H遺跡調査区図(1/1000)



3 調査の概要

調査は1989年5月10日から8月19日までの4カ月間にわたって行った。調査に際して、調査対象地を便宜的にA、B、Cの3地点に分け、順次調査を行った。対象地は油山から延びる丘陵上に位置するが、旧市営住宅建設時の造成工事でかなり削平をうけている。遺構面は花崗岩の風化土で、地表から10~30cmで検出できる。以下、調査の概略を列記していく。

A区

調査面積は約330m²で、遺構面の標高約27~28mを計る。丘陵上は削平が著しい。遺構は丘陵の東側の傾斜面で、弥生時代中期の甕棺墓3基、古墳時代後期の竪穴住居跡1基、柱穴多数を検出した。遺物は遺構と傾斜面に堆積した包含層から、弥生土器、土師器、須恵器、鉄滓が出土した。

B区

調査面積は約240m²で、遺構面の標高約27mを計る。調査区の大半は造成工事で削平されている。遺構は土坑2基を検出した。時期は不明である。遺物はほとんどなく、土器片が少量出土したのみである。

C区（梅林古墳）

C区では古墳1基を調査した。古墳は油山から派生して北西に延びる丘陵尾根に沿って築造された、横穴式石室の前方後円墳である。後円部を丘陵尾根上方に、前方部を尾根先端に向ける。調査前の古墳は、周囲を旧市営住宅建設時の造成工事で、約1~3mの削平をうけている。幸い古墳の丘には住宅等は建てられていなかったが、古墳の部分だけが囲地の中に取り残された状況にあった。現況を見るかぎり、墳丘は前方後円形を呈していたが、その段階では前方後円墳という確証を得るに至らず、円墳として、調査を開始した。しかし、調査が進むに連れて、前方後円墳であるということが判明した。墳丘は一部、削平されているが、残りが良い。標高は30~33mである。石室は天井石と側壁の一部が崩落している。副葬品として、須恵器、土師器、鉄製品（鉄斧、鉄鎌、鞍金具、鏡具、銅留金具等）、玉類がある。また、くびれ部で、須恵器の器台、高杯が破砕された状態で出土した。

古墳は建築局との協議の末、保存されることになった。調査終了後、墳丘のトレンチは真砂土で埋め戻し、石室は真砂土および砂を詰めた土のうで埋め戻した。

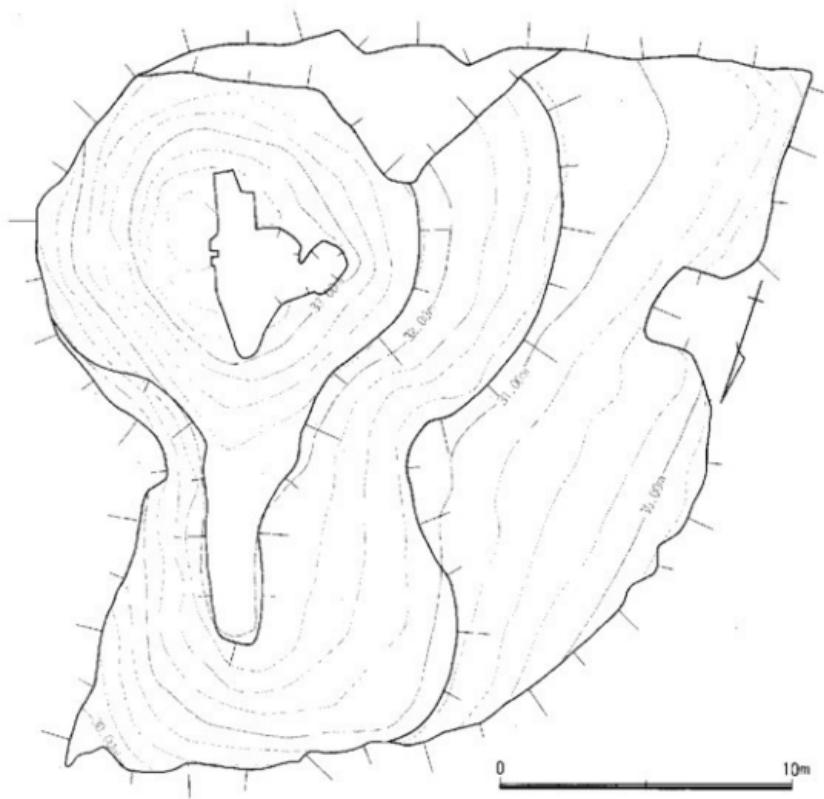
調査の経過 1989年5月10日 A区表土剥ぎ開始

5月20日 B区表土剥ぎ開始

6月1日 A区終了、C区調査開始

6月3日 B区終了

6月6日 石室内の埋土除去、墳丘の表土剥ぎ開始



第4図 梅林古墳調査前現況図(1/200)

- 6月13日 墳丘の北側（前方部）にトレンチを設定、盛土と判明
- 6月27日 墳丘の表土剥ぎ終了、墳丘の遺存状況の空中写真撮影
- 8月3日 実測・遺物取り上げ終了、トレンチの埋め戻し開始
- 8月6日 現地説明会、盛況のうちに終わる
- 8月9日 石室の埋め戻し開始
- 8月19日 調査終了、現場事務所撤収 (菅波)

4 梅林古墳の調査

1) 立地と調査前の状況

梅林古墳は野萩台団地（旧市営団地）の中で、開発をのがれて残っていた、横穴式石室の前方後円墳である。古墳は油山から派生して北西に延びる丘陵上にある。この丘陵は更に細かく枝別れしており、古墳は枝別れした西側の小丘陵の先端部分に築造されている。古墳の東側には小さな谷がはいり、西側は緩やかに傾斜して、平野部に至る。基盤は花崗岩の風化土である。古墳の上からは早良平野、博多湾が一望できる。標高は約30~33mである。

古墳の周辺は旧市営住宅建設の造成工事のため、1~3mの削平をうけている。しかし、幸運にも古墳の上には住宅などは建てられず、その後は緑地として残され、子供たちの遊び場になっていた。調査前に現地を踏査した時には石室の部分は陥没して、ビール瓶や空き缶などが捨てられていた。墳丘の形が前方後円形をしているという印象をもったが、周囲の造成工事がそのような形で行われていたこともあって、前方後円墳であるという確証を得るにはいたらなかった。したがって、径10m程度の円墳として、調査は開始した。

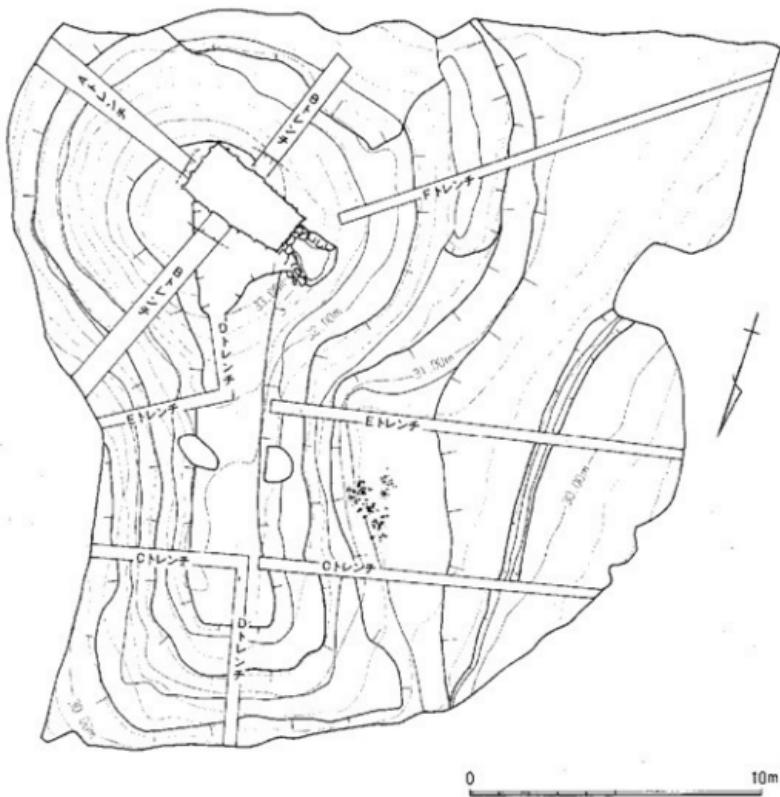
調査は既に陥没していた石室の埋土を除去し、墳丘の規模・構造などを確認するために石室の主軸に対して十字形のトレントを設定した。あわせて、古墳の周辺の表土剥ぎを行った。表土剥ぎが進むにつれ、古墳の北側（前方部）に墳丘らしきものがあることがわかり、その位置にトレントを設定した。トレントをいた結果、当初地山と考えていた古墳の北側は盛土であることが分かった。そこで更に幾つかのトレントを設定し、くびれ部、前方部の裾などを確認し、この古墳は円墳ではなく、実は前方後円墳であるという結果に至った。

この古墳が前方後円墳と分かった時点では、早良平野でも数少ない前方後円墳であり、保存すべきではないかということで建築局と協議した。そして、調査も古墳の保存を考え、トレントなどは必要最小限に留めるよう注意した。したがって、今回の調査では盛土の下の構造や石室の掘り方などは断片的にしか分かっていない。また、前方部のトレントは前方後円墳と判明する前に設定したため、必ずしも墳丘の中軸を通るものではない。

2) 墳丘

遺存状況 古墳は丘陵尾根に沿って築造され、前方部を尾根先端に、後円部を尾根上方に配置する。墳丘はその両端と東側が削平されているが、比較的残りがよく、段築がよくわかる。また、古墳の西側は削平をうけていないので、古墳の規模、墳形などを推定することができる。墳丘斜面には腐食土と流出した封土が堆積している。封土の流出は西側の方が相対的に多い。墳丘の現存長約25m、幅（後円部）約15m、高さ（後円部）2.3mを計る。

墳丘構造 墳丘は前方部・後円部とも二段築成である。各段の斜面には葺石は見られない。また、埴輪などの樹立も見られず、両者とも当初からなかったものと考える。墳丘は丘陵に沿つ



第5図 梅林古墳墳丘遺存図(1/200)

て、後円部から前方部へ下降しており、墳裾のレベル差は約0.8mある。

墳丘の封土は大半が盛土である。盛土は後円部ではテラスより上で、前方部は一段目の斜面の中程から上で認められる。それ以下は地山の削り出しによって整形される。

盛土には地山である花崗岩の風化土が用いられ、1.赤褐色粘質土、2.黄褐色粘質土、2'黄褐色粘質土と黒色粘質土(5cm程の厚さの黒色粘質土の上に20cm程の厚さの黄褐色粘質土が重なる)、3.黒色粘質土(旧表土)からなる。盛土には弥生土器や縄文土器等が含まれており、築造以

前にはこの地に当該期の遺構があったことが推定できる。

盛上は丁寧に積み重ねられているが、あまりしまりが良くない。また、前方部と後円部とはかなり様相が異なる。

後円部の盛土（A-A'トレンチ、B-B'トレンチ）は一つ一つの層が細かく、比較的しまりがよい。後円部の盛土を観察すると、石室の構築と並行して盛土が行われていることが分かる。まず、掘り方に腰石を据え、掘り方を埋める。その上に少しこぶりの石を傾斜させながら積み重ねていく。裏側は粘性の強い1の粘土で固定していく。これを順次繰り返して、石室を構築していく。こうして、石室を構築したのちに、墳形を整えるための盛土が行われる。この時の土には主に2・2'の土を使い、1は土止めのために使われる。したがって、石室の裏込めを兼ねた土ほど一つの層が細かく、墳丘の外側にいくにつれて、層が大きくなるのが分かる。後円部で約1.8mの盛土が認められる。

一方、前方部の盛土（C-C'トレンチ、D-D'トレンチ）は後円部と同様の土が使われているが、後円部ほど細かく積み重ねられていない。したがって、しまりも良くなく、盛土の流出の度合いも後円部より大きい。前方部は後円部の盛土が完成した後に、それに継ぎ足すように盛土される。前方部で約0.7mの盛土が認められる。

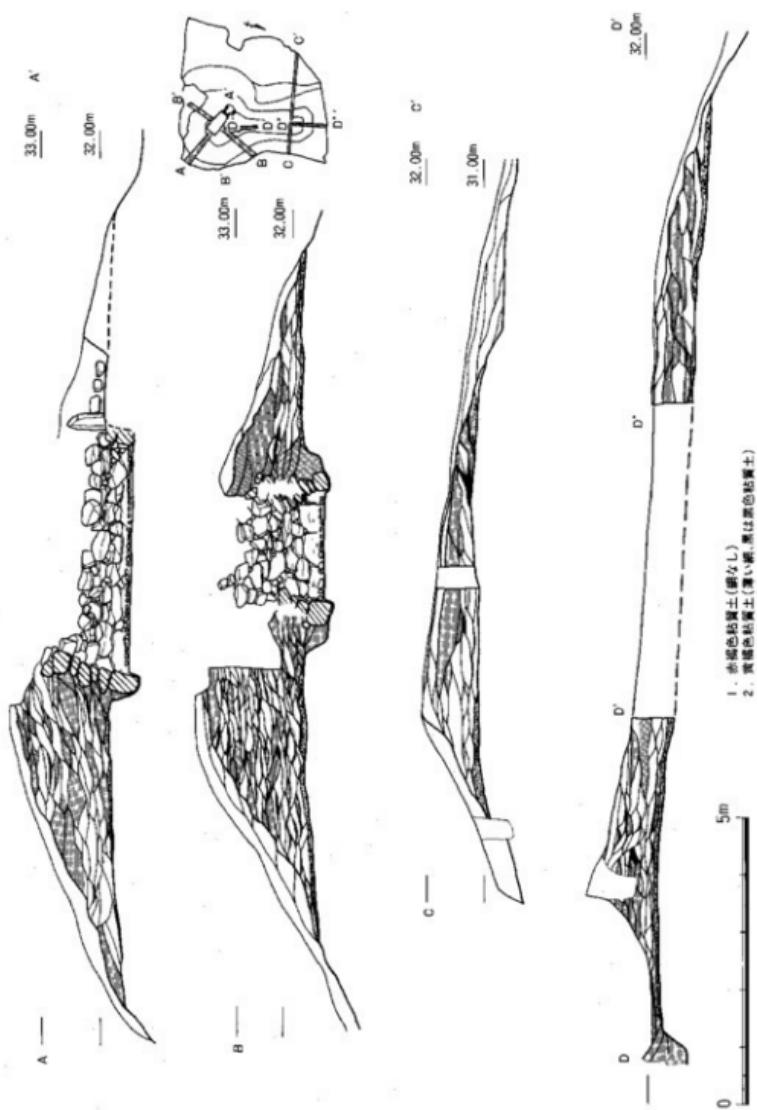
地山整形は後円部と前方部の一級目の削り出しと盛土の基底面の整地が行われる。後円部・前方部の削り出しあは丘陵に平行して行われ、後円部の方が高い。削り出したみかけの高さは後円部・前方部とも約0.5mとなる。後円部南側には尾根から丘陵を切り離した際の溝が巡るが、地山整形の際は深さ1m以上掘削されたと推測される。盛土の基底面の整形はほぼ水平に行われているが、後円部端からくびれ部まで比高差が10cmであるのに対し、くびれ部から前方部端までは80cmとかなり傾斜している。

ところで、前方部西側の墳裾には幅約3mの平坦面がある。東側にもこのような平坦面があつたかは不明である。ここからは須恵器の器台と高杯が破碎された状態で出土している（第7図）。これらの須恵器は出土状態から墳丘が完成した後に、この位置に廃棄されたと推測される。これらは古墳の副葬品とほぼ同時期であり、また、この位置が石室の開口する方向にもあたり、墓前祭祀に使用されたものと推定する。したがって、この平坦面には祭祀の場としての性格を考えられる。

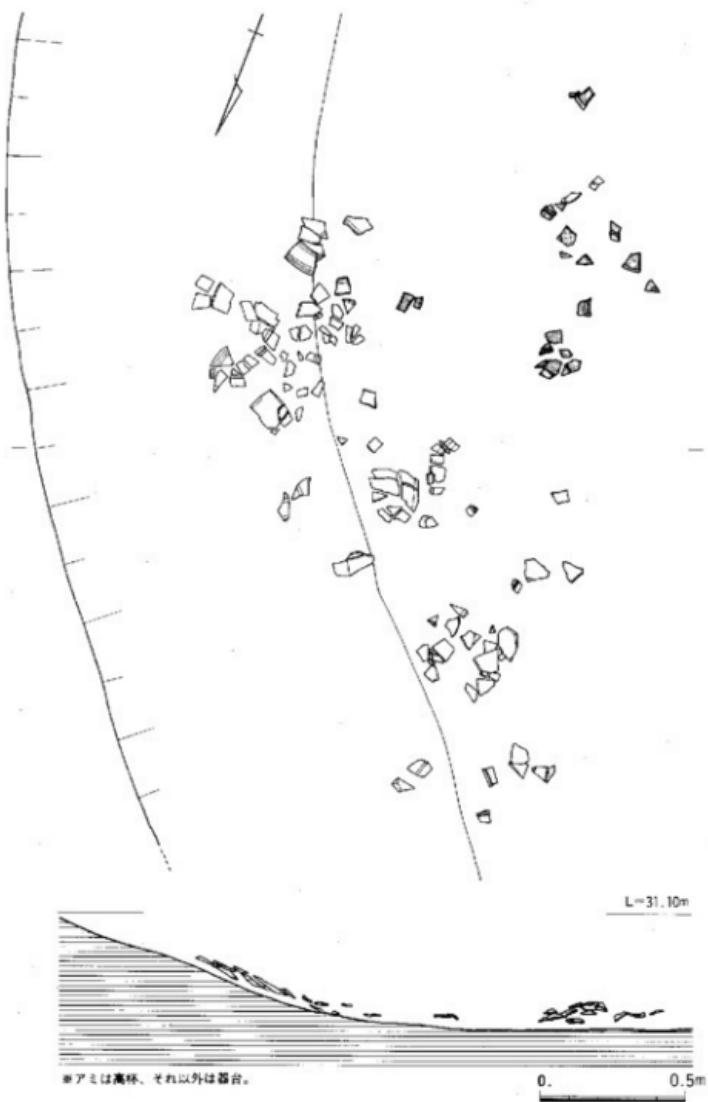
墳丘規模 規模は墳丘が削平されているため、推定せざるを得ない。しかし、墳丘の二段目と西側の墳裾が比較的の残りが良く、そこから後円部の中心点と墳丘の中軸を求めた。それらをもとに復元した墳丘の規模は第1表に示す通りである。

	全長	後円部径	くびれ部幅	前方部長	前方部幅	後円部高	前方部高
1段目	(27)m	(15)m	(7~8)m	(13~14)m	(14~15)m		
2段目	(21)m	11~12m	5m	10m	5m	2.3m	1.2m

第1表 墳丘規模()の数字は推定復元値)



第6図 梅林古墳堆丘土層断面図(1/100)



第7図 梅林古墳くびれ部遺物出土状況図(1/20)

3) 横穴式石室

本墳の埋葬施設は単室両袖型の横穴式石室である。主軸方位はN-69°Wで、西側に開口する。石室は既に天井石、壁石の一部が崩落し、そのため、石室は流土で埋没していた。石室は羽子板形のプランを有する玄室に、短い墓道（前庭部）が連接する。墓道の側壁は左右非対称で、左壁の方が開き気味になる。石室を構築する石材は花崗岩の転石が使用される。

玄室 玄室は奥壁側が幅広の羽子板形のプランを呈する。全長3.95m、奥壁幅1.94m、袖石側の幅1.44mを計る。

天井石は既に崩落していたが、奥壁の最上部に天井石の一部がかかっており、そこから石室の高さは約1.5mと、推測できる。今回の調査では4枚の天井石が残存していた。それらは法量110×60cm、130×60cm、140×100cm、130×50cmである。石室は持ち送りになっているが、1枚あわせても270cm程で全面を覆うに至らない。そのためにはあと1~2枚の天井石が必要となる。したがって、今回検出しえなかった天井石は持ち去られた可能性が高い。天井石が盗掘をうけて取り去られたのか、石室が陥没した後に取り去られたのかは明確にはしがたい。なお、袖石より外側（墓道）には天井石は架構されなかったと考える。

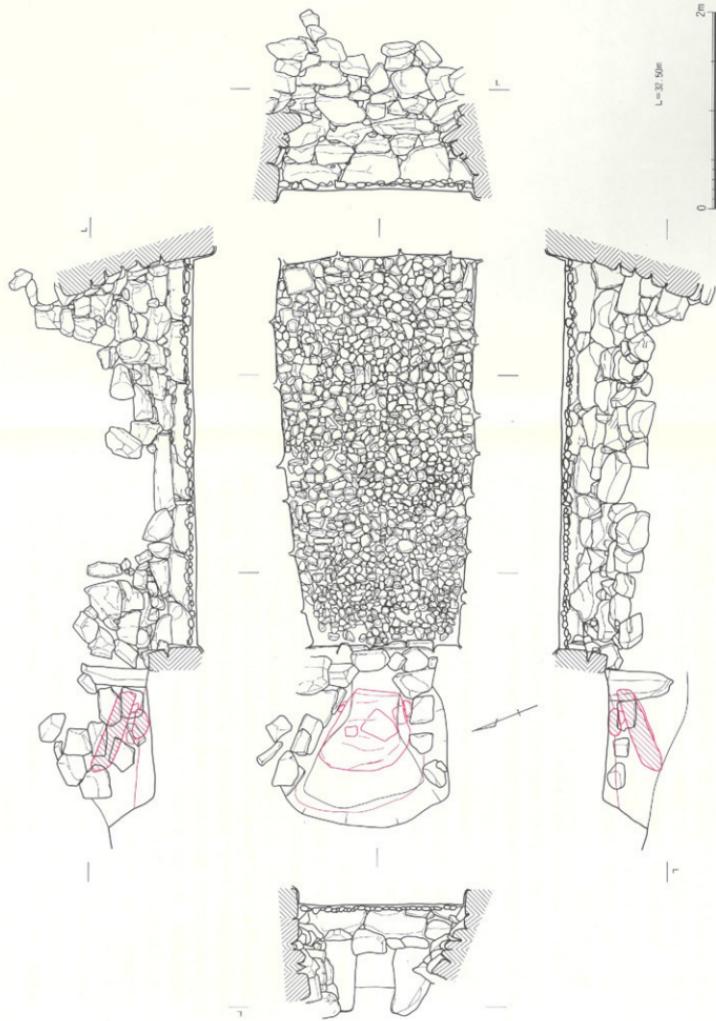
石室の構築法は前項でも述べたが、埴丘の盛土と並行して行われる。掘り方に腰石を据え、粘土で裏込めする。その上に少しこぶりの石を持ち送り気味に積み、裏側を粘土で固定する。内側の壁石の間にはこぶし大の礫をつめて安定をはかる。それを順次繰り返して石室を構築する。上方になると、裏込めの石も若干認められる。

各壁ごとに見ていくと、奥壁には幅50~60cm、高さ60cmの石を立てて腰石とする。腰石より上は30~50cmの石を持ち送りながら横積みしていく。石の大きさはまばらだが、現存で8段の石積みがなされている。奥壁と側壁の隅角は互いの石が重なるように積まれている。しかし、左壁の隅角は比較的偏平な石が用いられているのに対して、右壁の方は不整形である。そのため、右壁は左壁に比べて安定が悪く、内側にかなりせり出している。

左壁は腰石に幅60~80cmの石を7個立てる。それより上は20~80cmの石を横積みしていく。奥壁側で7段の石積みが残る。右壁もほぼ同様である。

玄門部は両袖で、高さ70cmの偏平な板石を立てる。袖石は二段積まれた框石の上に積まれる。袖石は側壁に挟まれるように立てられており、構造上、袖石の上に直接架構するように石（櫛石）が積まれたとは考えにくい。したがって、天井石は袖石上面の側壁に架構され、袖石と天井石の間には20~30cmの隙間が存在したと推測される。框石は幅30~60cmの石を3個使用し、その上にこぶりの石を一段横積みする。そのため、墓道（前庭部）から玄室に入る際、一段降りるような形になる。玄門の幅は約40cmで非常に狭い。

床面には全面にわたって、敷石がある。敷石には壁石同様、花崗岩が用いられる。奥壁左隅の一辺約30cmの方形の石以外はこぶし大の偏平な石を用いる。



第8圖 榆林古漢廟六式石室圖(1/40)

奥壁・両側壁の表面にはベンガラが塗られている。床面にも部分的に赤色顔料が見られたが、どの程度床面に散かれていたかは不明である。

閉塞施設 閉塞石は検出した段階では外側に倒れていた。閉塞石の裏側には根がための石が検出された。閉塞石は長さ90cm、厚さ20cmの板石で、平面形は逆台形を呈する。上端幅約90cm、下端幅約50cmを測る。この石が袖石の外側に密着するように立てられて、閉塞を行ったと想定できる。その際、閉塞石の高さは袖石の高さを20~30cm上回ることになる。したがって、前述した、袖石の上の隙間はこの板石で塞ぐことができる。玄門はこの板石で閉塞されたのち、墓道とともに埋め戻されたと考える。

墓道（前部） 墓道は墳丘盛土を掘りこんだ竪坑状のもので、平面形はハの字形を呈する。框石からの長さは1.6m、幅1.6mを測る。墓道の断面形は逆台形を呈し、両側面には約30cmの石が貼り石状に積まれている。墓道は閉塞に伴って、埋め戻されたと考えられる。梅林古墳は追葬があったと考えるが、追葬の際には竪坑状に墓道を掘り起こして、閉塞を取り外し、埋葬したと想定される。したがって、この竪坑状の墓道は追葬時のものである。

掘り方 掘り方は後円部のほぼ中央部に設けられる。墳丘を除去していないため、掘り方の全形は不明確だが、トレンチの観察から長軸長約4.6m、短軸幅3.5mを計る。深さは約50cmで、腰石の部分は更に30cm程掘りくぼめられる。その掘り方の内側に腰石・框石は据えられ、外側は粘土で埋められる。

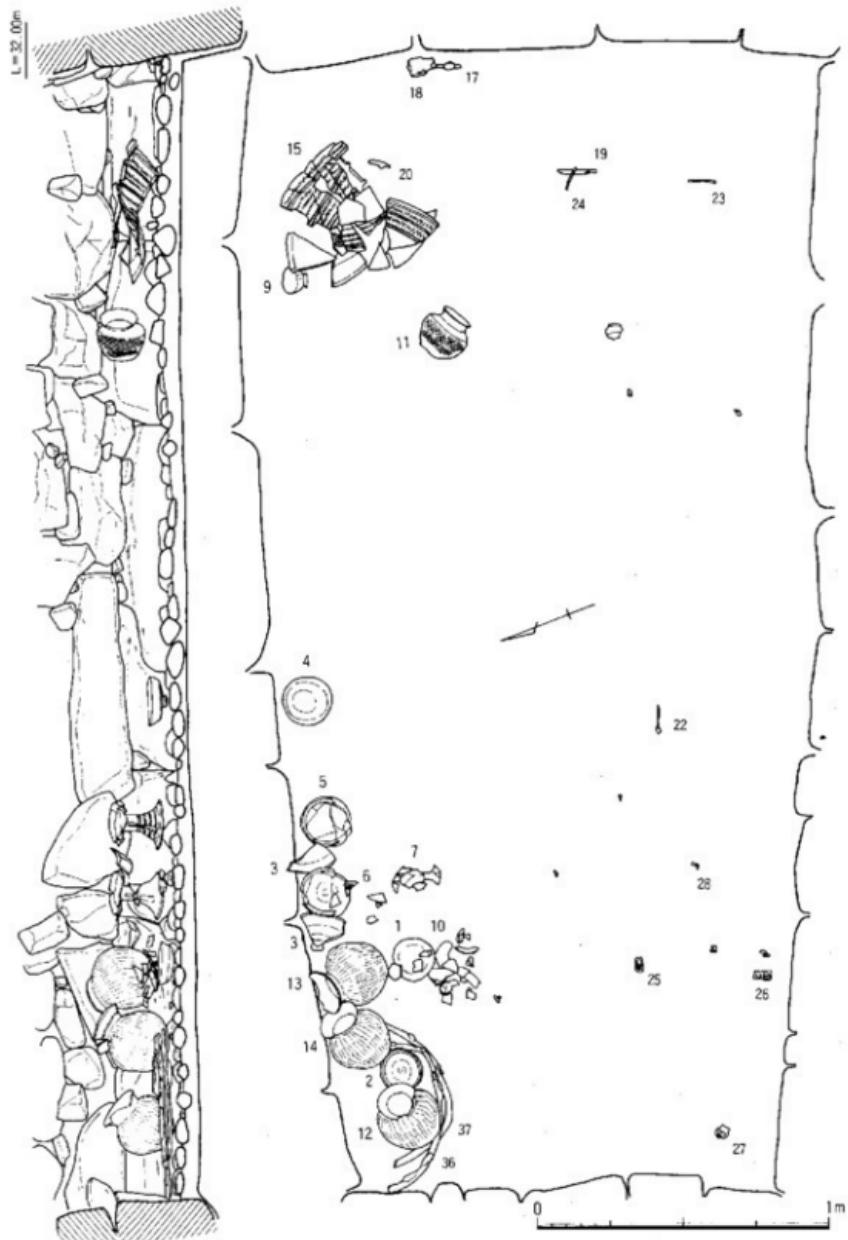
石室の構築法を整理すると、以下のようになる。

1. 後円部中央に掘り方を設置する。
2. 幅50~80cmの腰石・框石を据え、粘土で埋め込んで掘り方を埋める。
3. 腰石より上はこぶりの石を横積みして、持ち送っていく。奥壁と側壁の隅角には三角持ち送り手法で石を積み上げる。
4. 袖石には二枚の板石を使用する。袖石は框石の石に積まれる。
5. 壁石を約1.5m積み上げた後に天井石を載せる。天井石は平積みで5~6枚使用される。
6. 埋葬後、玄門を高さ90cmの板石で閉塞する。墓道は埋め戻す。

4) 遺物の出土状況

石室内には天井石が崩落して流入した土砂が堆積していた。しかし、須恵器などの副葬品はほぼ完形のままで残っており、ほぼ原位置を保っていたと考えられる。このほか、前項で述べたように、墳丘裾から破碎した須恵器の器台と高杯が出土している。

副葬品の出土状況を見ていくと、奥壁側と袖石側の二ヶ所に集中が見られる。奥壁側からは須恵器器台（第12図-15）、甕（第11図-11）、土師器台付椀（第10図-9）、椀、鉄斧（第13図-18）、蟹（第13図-17）、刀子（第13図-19、20）、鐵鎌（第13図-23、24）等が出土した。器台は破碎されていたが、これは石室が崩れた際につぶれたものと考える。



第9図 梅林古墳横穴式石室内遺物出土状況図 (1/20)

抽石側からは須恵器甕（第12図-12、13、14）、高杯（第10図-5、6、7）、蓋（第10図-3、4）、杯身・杯蓋（第10図-1、2）、蓋（第11図-10）、鞍金具（第14図-36、37）、銚具（第13図-25、26、27、28）、銀留金具（第13図-29、30、31）、鐵鎌（第13図-22）が出土した。副葬品は左壁際に須恵器が、右壁際に鐵器が集中している。須恵器はほとんど完形だったが、石室が崩れた際につぶれたものもある。玉類は埋土を洗浄した際に検出した。また、墓道からは小玉、鉄津などが出土した。

副葬品の様相を見る限り、両者には時期的な差が認められる。奥壁側を初葬時、抽石側を追葬時の副葬品と考える。石室・埴丘櫛から出土した遺物は以下の通りである。

容器

須恵器 15（うち2は埴丘櫛出土）

土師器 2

工具

武具

鐵鎌 3

鐵鎗 1

鐵斧 1

鐵刀子 2

不明鐵製品

馬具

銚具 5

銀留金具 4以上

鞍金具

覆輪前輪 1

覆輪後輪 1

その他 3

装身具

管玉 1

小玉 3（うち1は墓道）

5) 出土遺物

遺物の出土状況は前項で示した通りである。ここでは出土遺物の特徴などを記述していく。なお、8と16、第15図は埴丘から出土したもので、それ以外は石室から出土したものである。

須恵器（第11図1～8、第12図10～14、第13図15～16）

杯蓋（1） 口縁はハの字形に外反し、端部は不明瞭な段をもつ。口縁と天井部の境の稜は鋭

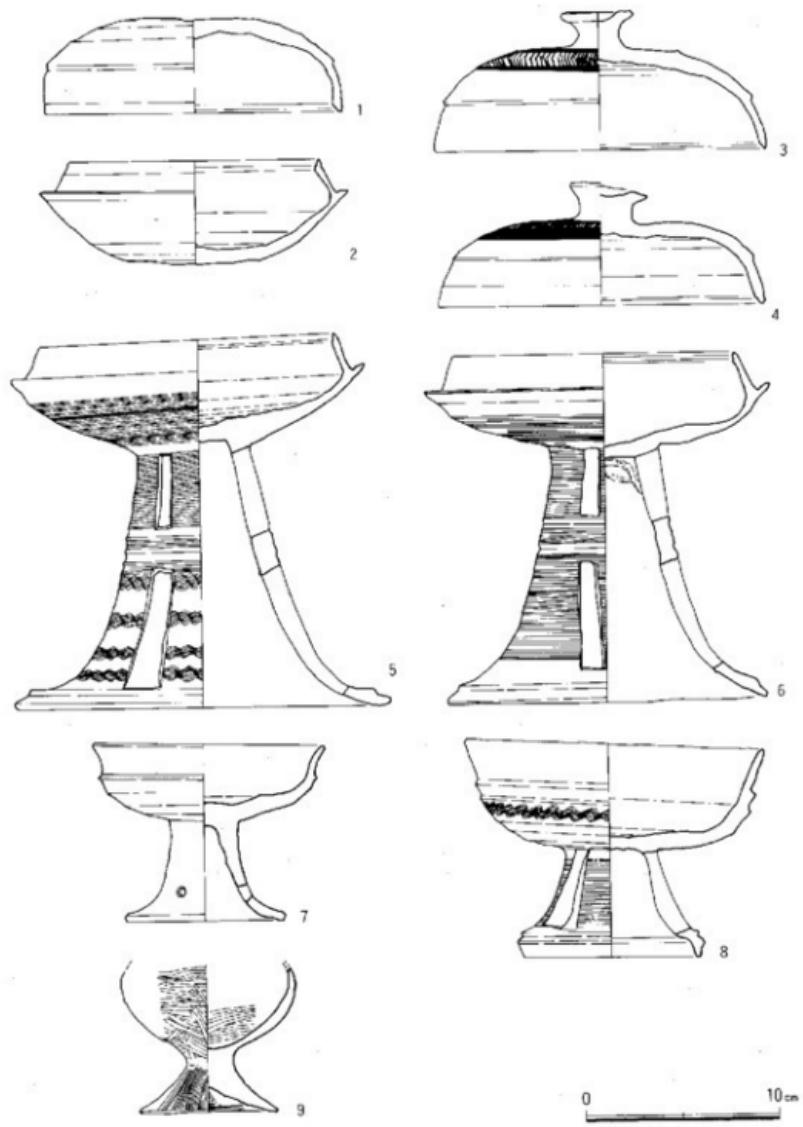
さがなく、下側を横ナデすることによって、浮かび上がらせた感がある。天井部の調整は回転ヘラ削りで、全体の約 $1/2$ に施されている。色調は淡青灰色を呈し、胎土は細砂を少し含む。焼成は良好である。器高4.8cm、口径15.3cmを計る。

杯身(2) 立ち上がりは比較的短かく内傾する。端部には沈線状の段がつく。底部外縁の約 $1/2$ に回転ヘラケズリが施される。色調は淡青灰色を呈し、胎土は細砂を少し含む。焼成は良好である。器高5.4cm、口径12.8cmを計る。

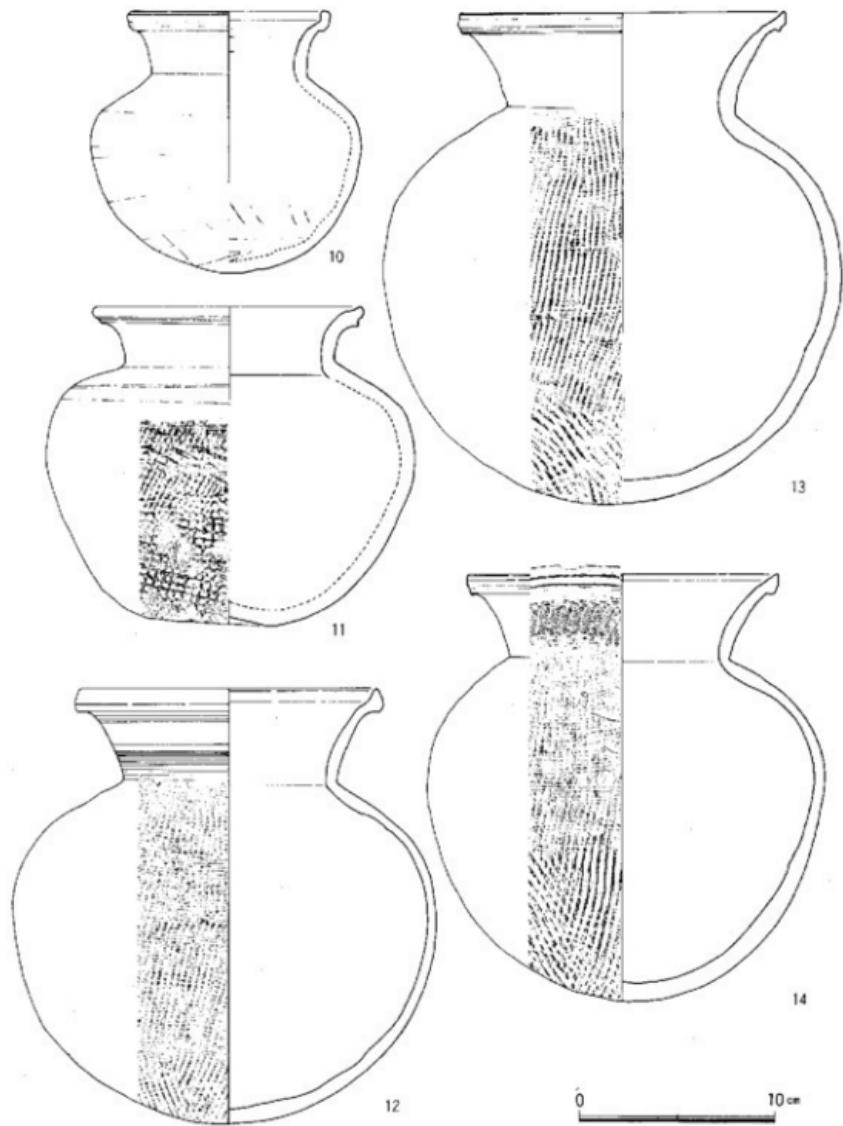
有蓋高杯・蓋(3・4) 3は口縁はハの字形に外反し、端部は不明瞭な段をもつ。天井部には中央部が凹むつまみがつく。口縁と天井部の境の稜は鈍い。天井部の $2/3$ にはカキメが施され、その上からカキメの工具による羽状の刺突文が施される。色調は淡青灰色を呈し、外面に自然釉がかかる。胎土は粗砂を少し含む。焼成は良好である。器高7.1cm、口径17.2cmを計る。6の高杯と対になる。4は口縁はハの字形に外反し、端部は不明瞭な段をもつ。天井部には中央部が凹むつまみがつく。つまみは少し焼き歪んでいる。稜は鈍く、痕跡的なものとなっている。天井部の $2/3$ にはカキメが施され、その上からカキメの工具による刺突文が施される。色調は淡青灰色を呈し、外面に自然釉がかかる。胎土は粗砂を少し含む。焼成は良好である。器高6.3cm、口径17.0cmを計る。5の高杯と対になる。

有蓋高杯(5・6) 5は口縁は内傾して短く立ち上がり、端部は沈線状の段をもつ。杯底部にはカキメが施される。脚部はラッパ状に開く。脚基部は太く、脚底径は口径を上回り、安定感がある。脚中央には二条の凹線が施され、その上下に長方形のスカシが配される。スカシは三方にある。脚外面にはカキメが施される。下段には櫛描波状文を施されるが、非常に難で、起点と終点がかみあっていない。脚端部には段をもつ。色調は灰色を呈し、脚内面と杯外面には自然釉がかかる。胎土は細砂を多く含む。焼成は良好である。器高18.9cm、口径15.2cm、底径17.4cmを計る。6は口縁は内傾して短く立ち上がり、端部は沈線状の段をもつ。杯底部にはカキメが施される。脚部はラッパ状に開く。脚中央には二条の凹線が施され、その上下に長方形のスカシが配される。スカシは三方にある。脚外面にはカキメが施される。色調は灰色を呈し、脚内面と杯外面には自然釉がかかる。胎土は細砂を多く含む。焼成は良好である。器高18.1cm、口径14.6cm、底径16.5cmを計る。

無蓋高杯(7・8) 7は口縁は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。体部中央には鋭い稜をもつ。底部の $2/3$ に回転ヘラケズリが施される。脚部はラッパ状に開き、端部は丸い。裾付近には三方に円形スカシが配される。色調は暗灰色を呈し、胎土は細砂を多く含む。焼成は良好である。器高9.1cm、口径11.6cm、底径8.2cmを計る。8は口縁は直線的に外反し、体部中央には二条の凸線が巡る。凸線の下には櫛描波状文が巡る。底部の $2/3$ に回転ヘラケズリが施される。脚部はラッパ状に開き、端部は下垂して、接地する。端部外面には段をもつ。外面にはカキメが施され、三方に長方形のスカシが配される。色調は青灰色を呈し、胎土は細砂



第10図 梅林古墳出土遺物実測図 I (1/3)



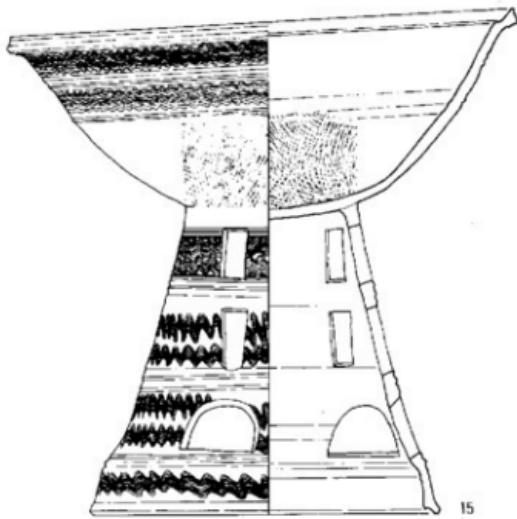
第11図 梅林古墳出土遺物実測図II (1/3)

を少し含む。焼成は良好である。器高11.0cm、口径14.4cm、底径9.0cmを計る。

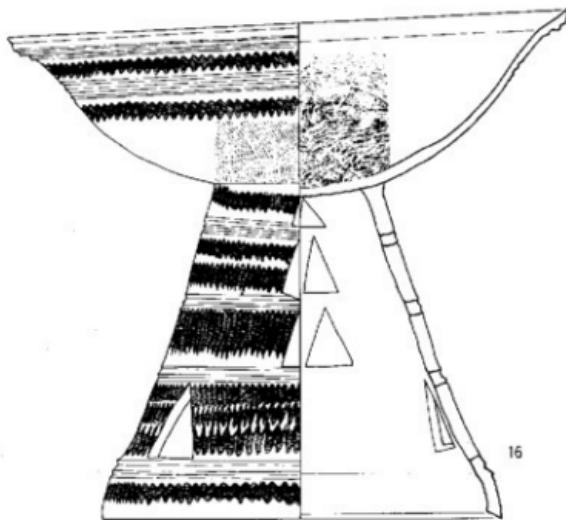
小型壺（10） 口縁は緩やかに外反し、端部は上方に立ち上がる。体部は球形を呈する。調整は口縁はロクロナデ、体部は肩部以下は回転ヘラケズリが施される。色調は淡青灰色を呈し、胎土は細砂を少し含む。焼成はあまり良くない。器高13.6cm、口径9.8cmを計る。

壺（11～14） 11は口縁は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。口縁下には削り出しの突帯が巡る。肩部は強く張り出し、一条の沈線が巡る。肩部に最大径がある。調整は外面は細かい格子叩きが施され、内面はなでて、当て具痕が消されている。色調は灰白色を呈し、胎土は細砂を少し含む。焼成は良好である。陶質土器の可能性がある。器高16.5cm、口径13.6cmを計る。12は口縁は緩やかに外反し、端部は上方につまみ上げる。体部は球形を呈する。調整は外面は平行叩きの後、カキメが施される。内面には同心円文叩きが残る。色調は暗青灰色を呈し、胎土は細砂を多く含む。焼成は良好である。器高22.5cm、口径15.2cmを計る。13は口縁は緩やかに外反し、端部は上方につまみ上げる。口縁下には一条の凸線が巡る。体部は球形を呈する。調整は外面は平行叩きが施される。内面には同心円文叩きが残る。色調は淡青灰色を呈し、胎土は粗砂を少し含む。焼成は良好である。器高25.3cm、口径16.6cmを計る。14は口縁は緩やかに外反し、端部は上方につまみ上げる。口縁下には一条の凸線が巡る。体部はややまのびした珠形を呈する。口頸部には柳描波状文が巡る。調整は外面は平行叩きが施される。内面には同心円文叩きが残る。色調は淡青灰色を呈し、胎土は細砂を多く含む。焼成は良好である。器高22.0cm、口径16.0cmを計る。

器台（15・16） 15、16とも高杯形の器台である。15は口縁端部は上方につまみ上げる。口縁下と杯部外面には鈍い凸線が巡り、その間が文様帶となる。文様帶には二条の柳描波状文が巡る。杯部の下半には格子叩きが施され、内面下半には青海波文が残る。脚部は外反し、端部付近で内側に屈曲する。端部外側が接地する。外面には鈍い凸線が巡り、文様帶を構成する。文様帶には二条の柳描波状文が巡る。また、文様帶には直線的に長方形と半円形のスカシが四方に配される。裾部にも一条の柳描波状文が巡る。色調は暗青灰色を呈し、胎土は細砂を多く含む。焼成はあまり良くない。器高33.6cm、口径23.6cm、底径23.6cmを計る。16は口縁端部は外側に鋭く立ち上がる。口縁下と杯部外面には鈍い凸線が巡り、その間が文様帶となる。凸線は15よりも鋭い。文様帶には一条の柳描波状文が巡る。杯部の下半には斜格子叩きが施され、内面下半は青海波文の後、ナデが施される。脚部は外反し、端部付近で内側に屈曲する。端部外側が接地する。外面には鈍い凸線が巡り、文様帶を構成する。文様帶には一条・二条・二条・三条の柳描波状文が巡る。また、文様帶には三角形のスカシが四方に配される。スカシは最下部のみ千鳥状になる。裾部にも一条の柳描波状文が巡る。色調は淡青灰色を呈し、胎土は細砂を多く含む。焼成はあまり良くなく、裾部の一部は生焼けである。器高33.9cm、口径38.2cm、底径27.4cmを計る。



15



16

0 10cm

第12図 梅林古墳出土遺物実測図III (1/4)

土師器（第11図9）

台付椀（9） 口縁端部の一部が欠けている。半球形の椀に直線的に聞く脚がつく。調整は内外面ともヘラミガキが施される。脚にはたて方向の刷毛目が施される。色調は淡橙色を呈し、胎土は細砂を少し含む。底径7.2cmを計る。（菅波）

武具（第13図）

鉄鎧（22-24） 22は菱形で両丸造の身をもち、関をもたないまま断面長方形の鎧被部に続く。茎部は断面円形で、その先端近くには桜らしき樹皮が巻き付く。23は片刃造刀箭式鎧、鎧被部は断面方形になる。接合はしないが、棘鎧被がある茎部と同一個体と考えられる。茎部には桜皮が付着する。24はやや折れ曲がっているものの身を欠いた鎧で、断面方形の鎧被部と木質痕のある断面円形の茎部が残存する。

工具（第13図）

鉄鑿（17） 残存長15.6cm、わずかに刃先端部を欠損する。頭部は敲打によりつぶれたものか。身は断面方形で直線的。刃部は厚みをもつ。片刃であろうか。この形態をとる鑿は県内では宗像市野坂一丁目遺跡4号住居跡、福間町手光古墳群南2号墳に小型ながら出土例がある。¹⁾大型のものは奈良県五条猫塚古墳で知られている。²⁾いずれも鍛冶関係の用途を考えている。鑿が単独に出土する場合、鍛冶具である確証はない³⁾とされるが、前庭部などに若干ながら供獻と考えられる鉄滓が出土していることから一応鍛冶具としてとらえておきたい。なお次にふれる鉄斧とともに奥壁部から出土しており、初春時の副葬品と考えられる。

鉄斧（18） 全長9.7cm、刃幅約7.0cmの有肩斧である。肩部は袋部に向かいわずかに突出する。袋部は断面長方形で、この種の鉄斧にみられる閉じ合わせ部が認められないことから、鑄造品であると考えられる。刃部は丸みを帯びた両刃である。類例としては宗像市名残17号墳出土鉄斧⁴⁾がある。

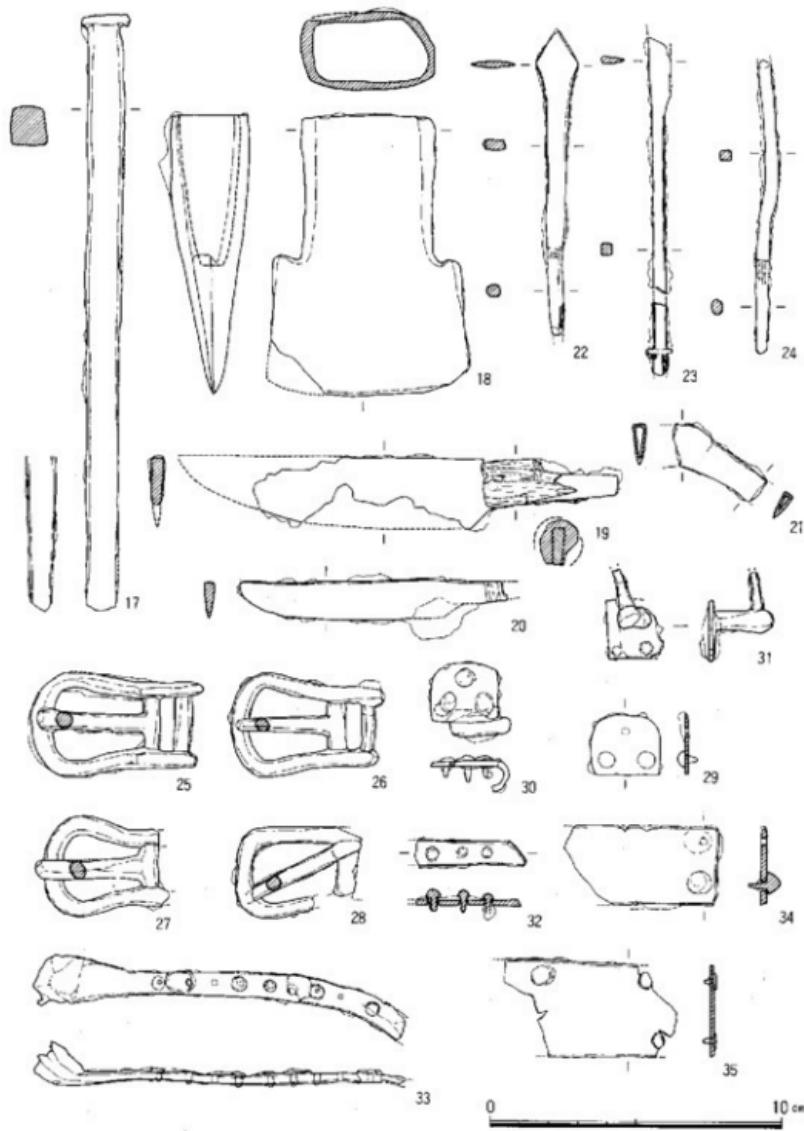
鉄刀子（19・20） 大小2点が出土した。ともに茎部には鹿角が着装されている。20は茎端部を欠いたもので、残存長9.2cm。

不明鉄製品（21） 鈍角に折れる部分のみが残存する。断面はともに刀子の刃部のような形態を呈する。

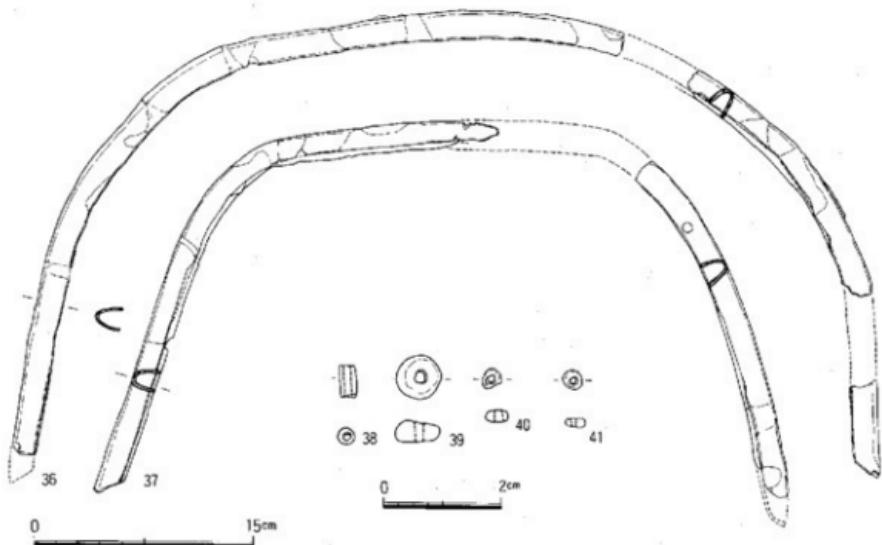
馬具（第13・14図）

鉄具（第13図25-28） 25・26は断面円形の棒状の鉄をU字状に折曲げ、基部を打ち広げて、刺金と一体になった横軸さらに1本の横軸を差し込んだものである。刺金は断面円形。27は頭部が円形状になり、また基部を欠くが、25・26とはほぼ同じ作りである。28は刺金の末端部を円環とし、そこに横軸を差し込んだものである。

銅留金具（第13図29-31） 29は一方を円形、一方を方形にした円頭直截形を呈し、3個の円頭紙を三角形に打ち込む。帶先金具であろうか。30は29と同様の銅留金具の下端に幅0.5cmの鉤手



第13図 梅林古墳出土遺物実測図IV (1/2)



第14図 梅林古墳出土遺物実測図 V (1/1, 1/4)

状のものが一体となって取り付く。31は一部欠損するが、方形の鋲留金具から横にL字状金具が突き出たものである。次に述べる鞍金具を含め、現状で金銅張りのものは確認できない。

鞍金具（第13図32～35、第14図36・37） 36は後輪、37は前輪の外縁に取り付けられた覆輪である。これらは左袖部で重なりあって出土した。しかし鋳化と破損が著しく、復元が困難であった。図の右半分はなお不明確さが残るが、あえて復元してみた。ともに断面はU字形で、下端部は斜めに切り取る。37の背の部分には數カ所小孔らしきもの、また側面には径5mmほどの円孔が1ヶ所うかがえるが、鋲のため確定はできない。5世紀初頭を下らないとされる老司古墳の3号石室からも覆輪端部片3点が出土しており、形態的には本墳と似るが、各々に小孔をもっている。

32・33は幅の狭い延鉄にほぼ等間隔に鋲を打ち込んだもので、礎金具としてよいであろう。32は端部、33はカーブをとる部分である。33の一端は鋲で膨れている。

34・35は幅広の延鉄に鋲を打ち込んだものであるが、先の礎金具に比べ鋲がやや大きめで、打ち込み間隔も大きい。34は端部を2本の鋲で留める。35は図の左側部分がわずかに幅広くなつ

ている。若干カーブをもつものか。ともに裏面には斜め方向の木質痕が認められ、鞍金具の一部と考えられるが、その部位は明確ではない。(濱石)

装身具（第14図38～41）

管玉（38） 黒青色の半透明のガラス製のもので、表面は比較的摩滅痕があり、細かな気泡も僅かに混じる。両端部の切断面は若干の丸みをもち、研磨を施している。長さ0.6cm、径0.3cmを測る。

丸玉（39～41） 39は古墳の石室内で検出された半透明のコバルトブルーのガラス製の玉で、他の丸玉より大きい。表面には、さらに青白色を呈する筋状の縞の混じりが認められる。玉の開孔部両面には研磨が施されている。径0.8cm、厚さ0.2～0.35cmである。

40はスカイブルーの半透明のガラス製のもので、古墳の羨道の埋土より出土したものである。開孔部ともいびつな梢円形を呈する。研磨は開孔部ばかりではなく、外面にも対応する位置に二ヶ所に認められる。径は0.35cm、厚さ0.2cmを計る。41は茶褐色を呈するメノウ製のもので、開孔部は若干の丸みがある。成形は不完全で凹凸が表面に認められる。また縦に筋状になった細かい縞が多く見られる。径は0.35cm、厚さ0.15cmを計る。

註) 1 原俊一『野坂一町間遺跡』『埋蔵文化財発掘調査報告書－1984年度－』宗像市文化財調査報告書第9集 1985

2 伊崎俊秋（編）『手光古墳群I』福岡町文化財調査報告書第1集 1981

3 奈良県教育委員会『五条高塚古墳』1962

4 潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』1982

5 飛野博文（編）『名残Ⅲ』宗像市文化財調査報告書第25集 1990

6 福岡市教育委員会『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 1989

6) その他の出土遺物

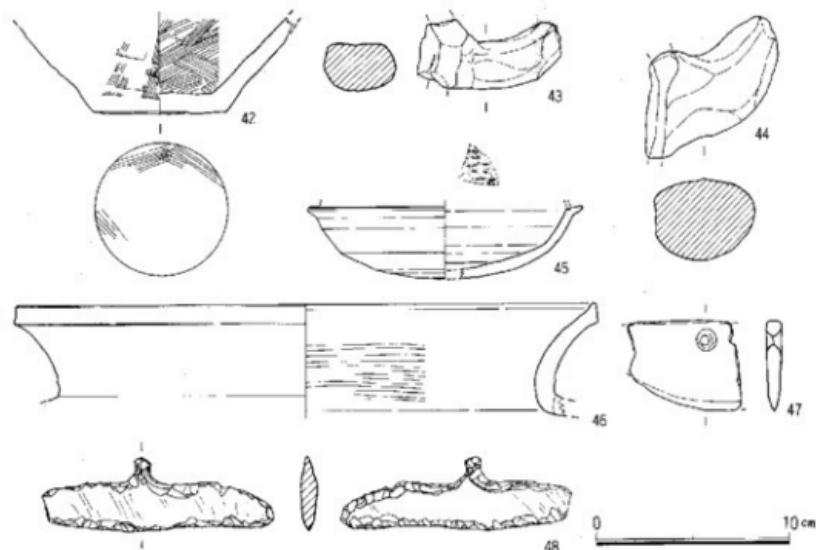
ここではC区の梅林古墳墳丘内およびその周辺から出土した遺物のうち火測可能な全てのものを取り上げることにした。

土器（第15図42～46）

弥生上器（42） 墳丘上のトレンチ内で検出したもので、甕の底部である。底はわずかに両端が上がり、丸みをもつ。全面に刷毛目痕があり、外底にも認められる。

土師器（43・44） 43は瓶の把手であろう。埴丘の表採である。器面には風化、摩滅が見られる。44も瓶の把手であろう。後円部東側の表採である。器面には風化、摩滅が著しい。

須恵器（45・46） 45は埴丘西側の表採で、口縁部が欠損する杯身、体部の1/3が残存する。体部下位では回転ヘラ削り、内底には一条の沈線を巡らし、その沈線の内側には同心円と思われる当て具の痕跡が見られる。復元受部径は14.0cmを計る。46は埴丘上で採集した大甕の口縁部破片で、1/8しか残存していない。口縁端部は上方向につまむ。口縁から肩部にかけ



第15図 梅林古墳出土遺物実測図 VI (1/3)

て明瞭な稜線を設ける。口縁部内面に、横刷毛目を施す。胎土は少量の砂粒が混じり、暗褐色～赤茶褐色を呈する。器面は灰黒色で、焼成は良好、復元口径は29.4cmを計る。

石器 (第15図47・48)

石包丁 (47) 墓丘頂部の埋土から出土した破片である。片面だけを研ぎ出した刃部を持つもので、両端部は欠損しているが、2個の穿孔がみられる。

石匙 (48) 古墳の玄室内の覆土から出土した。完形で、摘み部を含んだ最大幅は3.8cm、長さ11.8cmを計る。(林田)

5 A、B区の調査

1) 調査の概要

A、B両調査区域は幅員3.5mの市道を挟んで東西に相対している。以前よりこの地域は造成工事によりかなりの削平を受けているために、遺構の残りが悪い。そのような環境のもとで調査を行なった結果、遺構として検出したものは甕棺墓3基、竪穴住居跡1基、土坑2基のみである。その他にわずかにピットがある。

甕棺墓は全てA区の東北側に位置し、まとまって検出した。3基のうち1基は小児棺である。竪穴住居跡はA区の中央よりやや南側に寄った地点で、東側へ落ちていく傾斜面に床面の一部を検出した。しかし削平のために、遺構全体の把握は出来ない。西側に高さ30cm程の側壁の一部が残存する。住居跡内には一群のピットが南北両側に平行して検出され、この二つのピット群の間にもピットがみられる。土坑はB区の中央近くから南の方向にかけて西側に大きく落ちる傾斜面の落ちぎわで検出されている。

2) 甕棺墓

調査区全体がかなりの削平を受けているために、3基(S X01~03)の甕棺の残存状態は決して良好といえないが、甕の下半部が比較的に残っている状態で検出されている。墓壙も同様に削平の為に全体を把握することは不可能である。ここでは遺構検出面での状態を述べる。

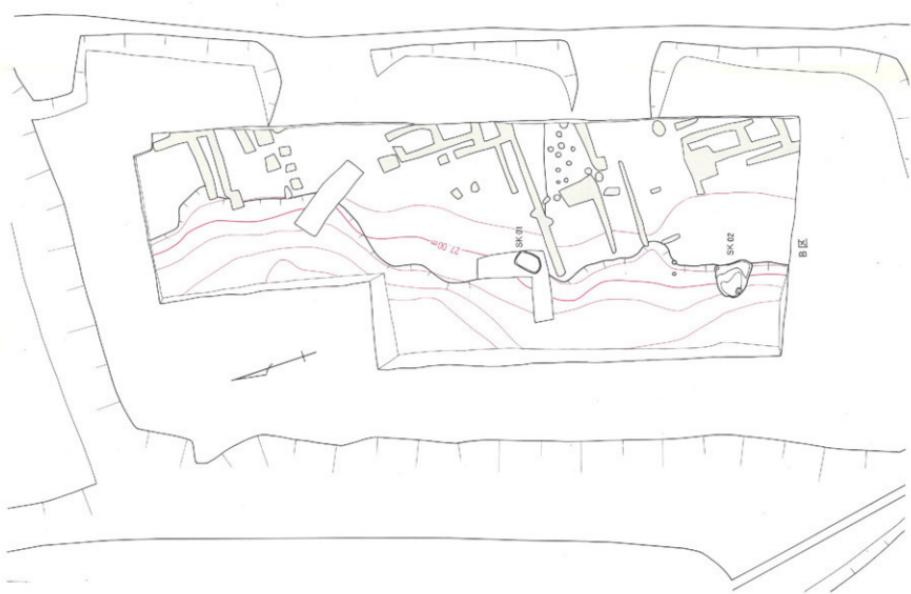
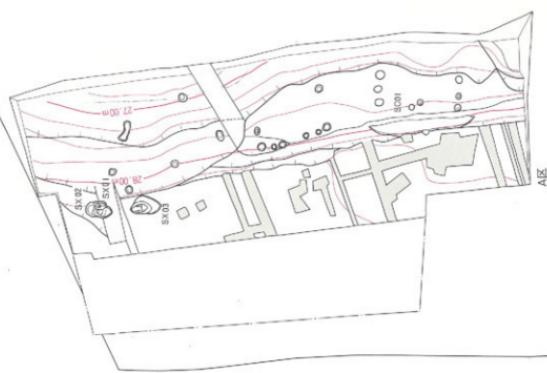
S X01甕棺墓 (第17図) 小児棺で、S X02甕棺墓の墓壙の一部東側を切っている。S X01甕棺墓の墓壙は推定0.45×0.7mの楕円形を呈し、0.1~0.3m程の深さが残存するだけである。挿入方位はほぼ墓壙の長軸の方向をとるものと思われ、N-25.0°-Eとなる。埋置角度は不明であるが、墓壙の底の角度と上下甕棺の埋置に傾斜角が認められることから水平ではなく、上方より斜め下方向に棺を埋置している。甕は上甕と下甕の口縁部が比較的良好に残存し、現位置をとどめているために、その接合形態が合口であることがわかる。この棺から出土した遺物及び人骨などはない。

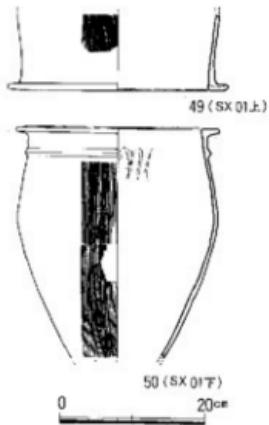
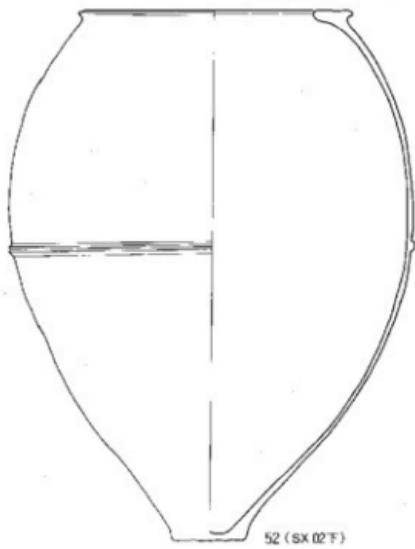
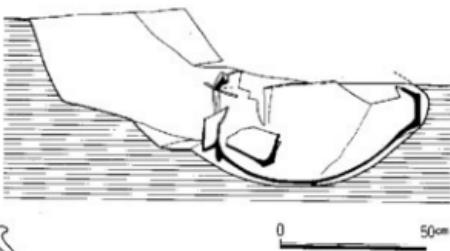
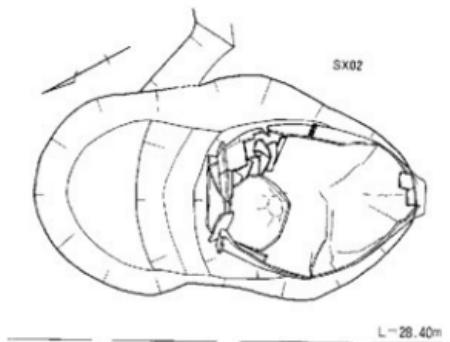
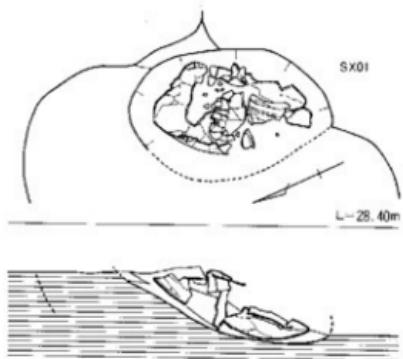
S X01甕棺 (第17図49・50) 49の逆「L」字状をなす口縁部は水平よりやや下向に傾斜する。口縁から胴部にかけては幾分外側へ膨れ気味となる。口縁部上面では強い横ナテによる凹みがみられる。胴部外面は織および斜刷毛目調整が施され、内面にはナテが行なわれている。砂粒が多く混じる胎土には金雲母、黒雲母を含み、茶褐色~暗褐色を呈する。復元口径30.4cmを計る。

50の逆「L」字上をなす口縁部は平坦に、外側へのびる。口縁部直下には三角突帯が巡る。胴部中央よりやや上部付近で最大径となる。突帯より下方の外面胴部では縦刷毛目を施す。内面は口縁直下に指圧痕がみられる。復元口径28.0cm、残高31.8cmを計る。胎土には比較的多くの砂粒、金雲母が混じる、淡茶褐色を呈し、外面胴部には黒斑がみられる。上下の甕とも弥生

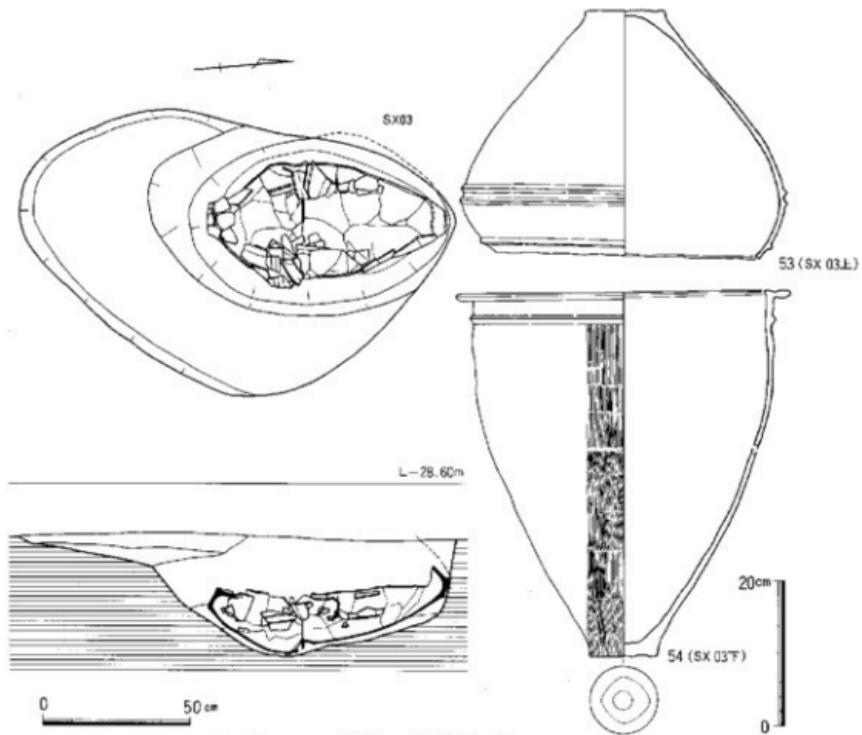
附16图 A、B区道路配建图(1/200)

10m
0





第17図 S X01・02櫛棺墓、S X01・02櫛棺実測図 (1/20, 1/8)



第18図 SX 03斂棺墓、斂棺実測図(1/20, 1/8)

中期中葉の時期に比定出来る。

S X 02斂棺墓(第17図) S X 01斂棺墓が検出された墓壙の下から、S X 01斂棺墓に一部切られるかたちで検出されている。墓壙自体、S X 01斂棺墓と現代の削平により上部がかなり破壊されているものの、比較的良好に残っている。上壙は口縁部を打ち欠き、下壙の口縁部とは粘土でもって、接合し、合口棺の形式をとっている。上壙は帯状のテラスになった面に埋置されていたが、接合部から滑り落ちる状態で下壙内で検出された。下壙は上半部を除き比較的の残存状態は良好である。検出面での墓壙の規模は北側にテラスを設け、 0.7×1.3 mの長楕円形を呈し、0.35~0.5mの深さを残す。棺の挿入方位はN-29°-Eとなり、埋置角度はほぼ水平となる。出土した遺物及び人骨はない。

S X 02斂棺(第17図51・52) 51は壙の口縁~崩部までの部位を打ち欠いて用いている。崩

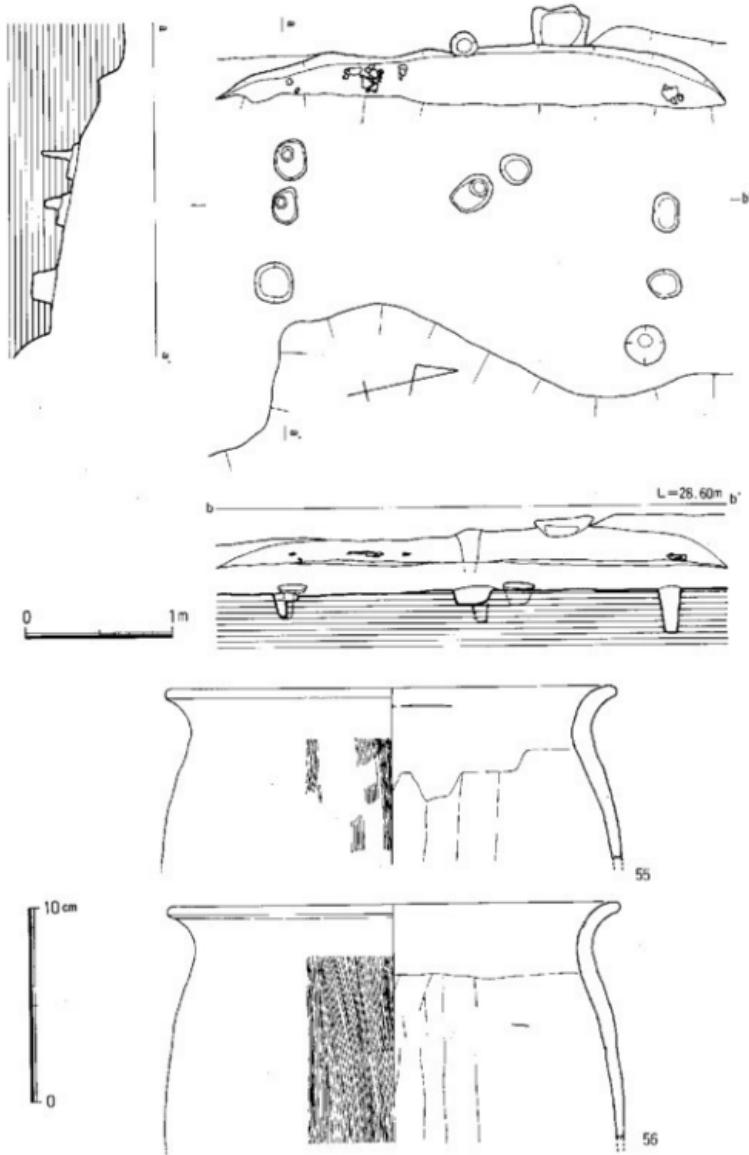
部外面調整は縦・斜刷毛目、内面はナデを施しているが、全体に風化、摩滅がある。底部の外はナデで、リング状の凹みがみられる。内面には指押えによる環状に並んだ凹がある。胎土には砂粒が多く混じる。淡褐色で、内面は灰色～灰黒色を呈する。外面胴部には黒斑がある。打ち欠きをした口径は29.1cm、器高は14.25cmを計る。52は甕で、口縁部が頸部から内側へ次第にのびていく。胴部はかなり丸味のある膨らみがみられ、最大径は胴部中位にあり、二条の三角突帯はここからわずかに下がったところで巡る。口縁部は横ナデ、胴部は突帯を除いて、ナデ調整を施す。砂粒は多く、淡褐色～淡灰褐色を呈する。肩部には黒斑がみられる、口径36cm、復元推定器高は約70cmを計る。時期は中期中葉に比定できる。

S X03 甕棺墓（第18図） 前者の2基より1.0m程南に隔たった地点で検出された。上甕棺は他の2基の甕棺より下半部の残りが良い。墓壙も削平は受けているが、検出面での大きさは0.9×1.5mで南側にテラスを設けていて、不整椅円形を呈する。深さはテラス面で0.1m程であり、0.4mが最も深く、上下の甕棺の口縁部が合わせてある付近である。棺の挿入方位はN-5.0°-Eとなり、埋置角度は15.0°である。この棺は合口棺で、出土した遺物及び人骨はない。

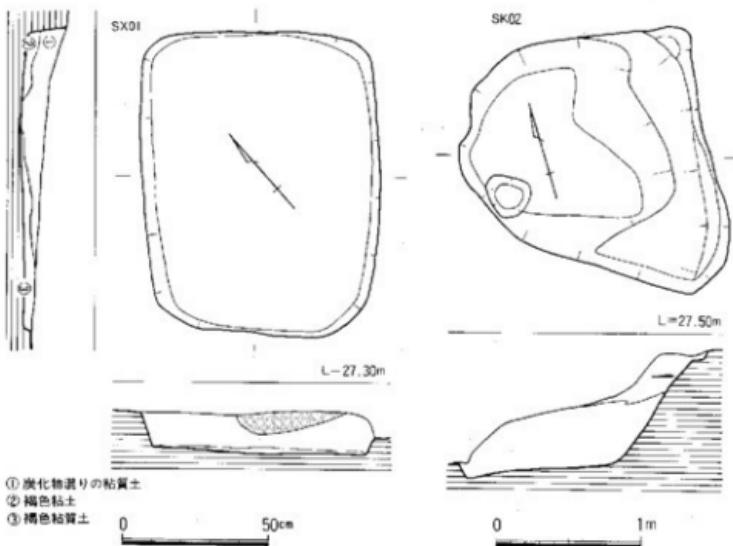
S X03 甕棺（第18図53・54） 53は大形の壺の口縁部を打ち欠いて上甕として用いている。口縁直下には一条の三角突帯が巡り、大きく外側への膨らみは胴部中位より上にある最大胴部径の地点まで達する。さらに二条の三角突帯が巡る。胎土には比較的少量の砂粒が混じり、外表面は褐色、内面は褐色～淡灰黒色を呈する。打ち欠きをした口径は25.9cm、器高は33.7cmを計る。54は甕で、逆「L」字状の平坦な口縁部は外へ水平にのびる。口縁直下には一条の三角突帯を巡らす。胴部の最大径はこの突帯の直下にあり、胴部の外側への膨らみではなく、底部に向ってすばまつていく。外底部には明らかにリング状に凹んだ痕跡がある。突帯から下の胴部外表面は縦刷毛目、中位以下では縦・斜刷毛目と変わる。胎土には比較的多くの砂粒が混じり、淡褐色～褐色の外表面には黒色顔料の痕跡が全体に認められる。内面は褐色～淡灰黒色である。口径45.8cm、推定器高は50.4cmを計る。上下の甕棺とともに中期中葉の時期に属する。

3) 壴穴住居跡

S C01（第19図） A区で検出した唯一の竪穴住居跡である。残存状態は決して良くないために正確なプランを想定することは困難である。但し西側に残っている壁の一部を考慮して復元すると、おそらく隅丸方形に類似したプランをもつものと考えられよう。遺構の残存状態から判断すれば、プランの規模は南北およそ5.2m、東西5.2m程が残存しているものの東側へ延びる床面は削平されている。この住居跡に伴うものは西側の端に最大幅0.55mが削平を免れた床面であるが、ここより東へ向かうにつれて床面は深く削平が進む。この床面の南北両側には柱穴が東西方向に3個ずつ一列にならび、さらに中央に近い地点に2個の柱穴がみられる。一つには柱痕がある。南側の二つ柱穴にも柱痕が認められる。これらの柱穴のどれがこの住居跡に伴うものであるか問題が残る。出土遺物は柱痕からはまったく検出していない。



第19図 S C01住居跡、出土遺物実測図 (1/40、1/3)



第20図 SK01・02土坑実測図(1/20, 1/40)

出土遺物(第19図55・56) 遺存する西側の床面からは土師器の甕、瓶、高杯、覆上からは甕、住居跡付近からは土師器の甕、高杯、須恵器の杯身が破片で出土する。実測可能なものは少なくここに載せた甕、あるいは瓶の2点のみである。55は瓶の口縁～胴部片である。把手は欠損するが、接合した痕跡が認められる。口縁部内面には沈線が部分的に巡る。胴部外面は煤の付着がある。復元口径は30.0cmである。56は甕であろう。口縁～胴部片で1／6程が残存する。口縁部は比較的緩やかに外反する。外面は黒色を呈し、内面は口縁部の灰黒色を除き、他は淡褐色である。復元口径は30.4cmを計る。

4) 土坑(第20図)

SK01 西へ傾斜した段落ちのすぐ上方で検出した。著しく削平を受けていることもあって、造構の性格を判断できる出土遺物は全くない。長軸を北東にとる。 $1.0 \times 0.83\text{m}$ の隅丸長方形のプランをし、深さは3.0～13.0cmで、南北方向に行くにしたがって深さを増す。造構の南西壁には図中に示すように焼上の痕跡があり、覆上の最上層①には炭化物が混じる。

SK02 調査区の南端に近い、東への段落ちのすぐ下で検出した。黄色橙色粘土の地山に深く掘りこんでいる。 $1.75 \times 1.53\text{m}$ 東西方向に長軸をとる。平面プランは不整形である。二か所に柱穴らしいピットを検出した。(林田)

6 まとめ

今回の調査で、梅林古墳は早良平野では1988年に調査された拝塚古墳につぐ2基目の前方後円墳であることが分かった。ここでは今回の調査で得た成果と今後の問題点について記述していく。

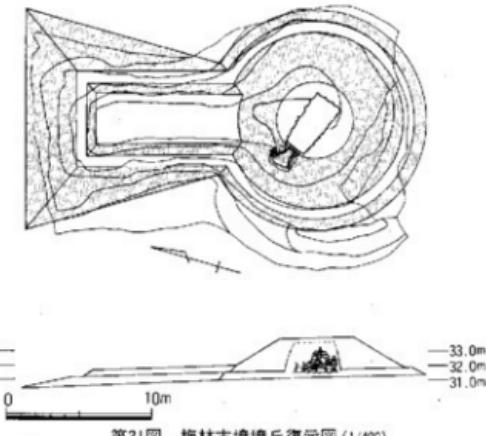
1) 墳丘について

古墳は油山から派生する丘陵尾根上に築造され、前方部を尾根先端に、後円部を丘陵上方に配置する。したがって、墳丘は後円部から前方部に下降する側面観をなしている。墳丘は地山整形と盛土からなる。地山整形は丘陵尾根を切断し、前方部・後円部を約0.5mの高さで削り出す。そして、基底面から、前方部で0.7m、後円部で1.8mが盛土される。盛土は地山と同様の花崗岩風化粘土を用いる。墳丘の規模は墳丘の両端と東側部分が削平されているため、推定せざるを得ない。墳丘測量図をもとに、残りの良かった二段目と西側の墳丘裾から墳丘の中心線を求めた。その結果、墳丘の中軸と石室の中軸の交点に後円部の中心点が求められた。そこから復元した墳丘が第21図である。古墳の中軸はN-16°-Wをとり、全長約27m、後円部径約15m、前方部長約13m、前方部幅約15mとなる。墳丘形は前方部が一段目が広がり、二段目はほぼ真っ直ぐに前方部が延びる。墳丘は前方部幅、後円部径がほぼ等しく、全長と前方部長の比が2:1になる。また、後円部の中心から後円部端の長さと後円部の中心から前方部端の長さの比が1:3(1単位約7.5m)という企画が想定される。

2) 石室について

石室の主軸はN-69°-Wとなり、西側に開口する。玄室の平面形は羽子板形を呈し、玄室長3.95m、奥壁幅2.0m、袖石側の幅1.44mを測る。高さは天井石が崩落しているため、不明確だが、辛うじて奥壁にかかっていた天井石から高さ約1.5mと推定できる。玄室比(長さ/幅)は1.98となる。尺度による石室の平面形の企画を考えると、奥壁幅は1尺約25cmとする晋尺で8尺、玄室長は16尺、袖石側の幅は6尺となる。したがって、1尺25cmとする晋尺で企画されたと考えられる。

次に石室の構造を列記する。



第21図 梅林古墳墳丘復元図(1/400)

1. 玄室の周壁は最下段に腰石を立て、その上に石材を持ち送り気味に積みあげる。

2. 玄門部は石を二段積み上げて、その上に2枚の板石を載せて、袖部を構成する。したがって、玄門部は墓道から一段下がる構造となる。

3. 大井石は幅1.5m前後、幅0.5~1.0mの石を5~6枚架構する。袖石と天井石の間には樋石を配置しないと考えられる。

4. 墓道（前庭部）は短く、堅坑状になる。側壁には貼り石状に石を配置する。

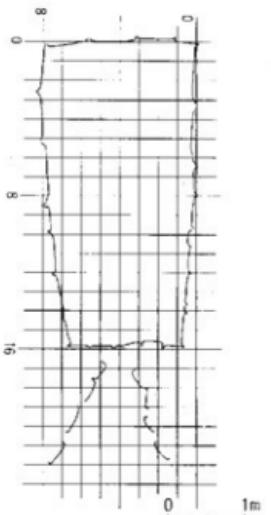
5. 門塞石は一枚の板石を用いる。

石室の規模、構造などで類例をもとめると、那珂川町井河古墳群1号墳は5世紀中頃に築造された円墳で、長方形プランで長さ4.0m、幅2.0mの、梅林古墳とほぼ同規模の石室をもつ。周壁の構造も腰石を用いるものである。福岡市南区屋形原箱池古墳は5世紀末~6世紀初頭の円墳で、長さ3.2m、幅1.3mの長方形プランの石室である。周壁の構造も腰石を用いるもので、奥壁の腰石は一枚の板石で構成する。規模は梅林古墳の石室よりひとまわり小さいが、袖石を樋石の上に配置する構造に類似点が見られる。同様の袖石構造は柏尾郡須恵町乙植木1号、6号墳にも見られる。これらは平面プランは羽子板形で、1号墳は玄室の長さ2.4m、幅0.8~1.0m、6号墳は長さ2.6m、幅1.5~1.8mで、いずれも5世紀後半に位置づけられる。これらの古墳を含め、梅林古墳の石室形態は広義の竪穴系横口式石室の範囲に入るものと考えられ、柳沢一男氏によるIII B期B型式の石室に当たる。梅林古墳についてみれば、石室の法量から、III B期B₁型式の石室に当たる。

3) 古墳の年代

今回の調査では墳丘裾や石室内から須恵器が良好な状態で出土した。ここでは出土した須恵器の検討を行い、古墳の時期について考えていく。

須恵器は出土状況から3つの群に分けられる。1群は墳丘裾から出土した器台と高杯、2群は石室内から出土したもの内、奥壁側から出土した器台、甕、3群は袖石側から出土した杯、高杯、甕である。1群の無蓋高杯は杯部は体部中位に穴を開け、下半には波状文を施される。脚部はハの字状に開き、端部外面には段をもつ。これらの特徴は陶邑編年ではI型式4段階あるいはTK23型式に相当するものと考える。器台についても脚部が端部付近で内側に屈曲する



第22図 梅林古墳石室 平面企画 (1/75)

特徴や脚端部外面まで波状文を施す点で高杯と同様の時期で問題ないと考える。次に2群についてみると、2群の器台は1群の器台と比較すると、器形などには大きな差は見出せない。しかし、細部においては体部の突線の鈍化、杯部の内面の当て具痕のナデケシの省略など型式的に新出の様相が看取される。II型式1段階の位置づけられる重留窯出土の器台と比較すると、重留窯出土の器台には脚端部の櫛描文の省略や突線の沈線化などが見られ、この段階までは下るものではないと考える。したがって、2群の器台は1群と同時期か若干下るものと考えられ、I型式4段階から5段階に位置づけたい。腰については類例が少なく、時期について明言できないが、内面スリケシや形態などからI型式段階のものできしつかえないと考える。3群については杯は大型化し、口縁と天井部の棱にも鋸さがない。また、有蓋高杯も長脚化し、二段のスカシを施される。脚基部は太い。これらの様相から3群の大半の須恵器はII型式3段階に相当するものと考える。ただ、無蓋高杯はI型式5段階の極小化した蓋杯を杯部にした様な器形であり、時期的に異なる可能性がある。

以上、それぞれの群の須恵器の検討を行った。須恵器には大きく2時期に分けられ、1、2群の須恵器を初葬時の葬送儀礼に伴うものとし、3群の上器を追葬時の副葬品とすると、古墳の初葬の時期はI型式4～5段階、追葬の時期をII型式3段階に想定される。したがって、古墳の造営の年代は5世紀後半から6世紀中葉に位置づけられる。

最後に、副葬品について若干の問題点について触れておく。今回の調査では石室内からI型式4～5段階の須恵器が副葬されていた。石室内の副葬品の様相が不明の古墳が多い中で、比較的良好な状態の出土例と言える。須恵器副葬の儀礼は朝鮮半島から影響が考えられており、北部九州では6世紀以後に定着していくようである。須恵器は初期段階から葬送儀礼に使用されて、埴丘上や周濠から出土する。しかし、初期須恵器・陶質土器の副葬は甘木市古寺・池の上墳墓群などの特別な例を除けば、稀である。須恵器の副葬は横穴式石室を導入した老司古墳や鷹崎古墳では見られず、5世紀後半～末になって見られるようになる。北部九州でI型式3段階～5段階の須恵器の副葬は須恵町乙植木6号墳、京都府刈田町番塚古墳などが上げられるが、この時期の類例はまだ少ない。須恵器の副葬は横穴式石室に伴う祭祀形態であり、石室形態の定型化とあわせて、後期古墳につながる画期と言える。

今回調査した梅林古墳は石室の形態など古い様相を持ちながらも、石室の向きも埴丘主軸平行でなく、くびれ部方向にとる。また、須恵器の副葬などの新しい葬送儀礼を取り入れるなど、後期古墳の要素を兼ね備えた古墳である。5世紀後半の時期は老司古墳や鷹崎古墳に始まる初期横穴式石室が様々な影響下の中、新たな葬送儀礼など取り入れて、横穴式石室として定型化していく試行錯誤の段階である。梅林古墳の在り方はその段階の一様相として捉えられよう。また、それが首長墓である前方後円墳であるということは、この後出現する群集墳の在り方を考える上で大きな意味をもつと言えよう。(苔波)

4) 早良平野の古墳時代

1970年代はじめまで、早良平野を中心とした旧早良郡は、弥生時代以降古墳時代にかけて権力の発達が不十分であり、その阻害原因は自然条件もさることながら、隣接地すなわち有力な権力をもった糸島平野（旧怡上郡、伊都国）と福岡平野（旧那珂郡、奴国）とにはさまれたいわば緩衝地域であったためではないかと言われてきた。弥生時代にあっては伊都国の三雲南小路、井原鏡遺構跡、奴國の須次岡本遺跡のような顕著な首長墓がみられないこと、また古墳時代では前方後円墳がないことがその説の根拠となっていた。

1970年後半から80年代にかけての相次ぐ緊急調査の結果、考古学からみた早良平野の歴史的状況は一変した。弥生時代では古武遺跡群の発掘調査により、前期末から中期前半にかけて他平野に卓越した階層性をもった首長が存在し（吉武高木）、平野や盆地を単位に「國」が成立すると考えられている中期後半には伊都国や奴國「王」には及ばないにしろ早良平野を統括したであろう首長一族の墓地が築造されている（隨流墳丘墓）。平野部では前期初頭から果敢な生産活動が行われており、また朝鮮半島と深い関係などを基礎に、他平野の「國」と遜色のない権力が発生、発展したものと考えられる。

古墳時代では神松寺古墳、柏原A 2号墳、押塚古墳、梅林古墳の4基が、発掘調査により前方後円墳であることが判明した。また前方後円墳（京ノ隈）、帆立貝式古墳（樋渡古墳）も調査され、さらに三角縁神獸鏡を副葬した方形周溝墓（藤崎6号墓）も発掘されるにいたった。これらの古墳に加え、すでに知られていた有力墳を地区ごとにまとめたものが第2表である。これらの古墳から早良平野の古墳時代の首長墓の系譜を探り、梅林古墳の位置付けを考えてみたい。

発生期から4世紀代の前方後円墳は現在のところ早良平野では知られていない。有力な古墳、墳墓として五島山古墳、藤崎方形周溝墓、京ノ隈古墳が、海岸部あるいは海岸に近い丘陵上に築かれている。これらは早良平野のなかで、室見川左岸、右岸、樋井川流域の3小地域の首長、¹⁰⁾首長階層の墓と考えられる。五島山は丘陵上に箱式石棺を主体部にもつ数基の古墳からなり、その最北端にある1基から2面の斜縁二神二獸鏡をはじめとした副葬品が出土した。藤崎は方形周溝墓というこの時期初めて北部九州に採用された墓の形態をとる。十数基が群集、そのうち5基から鏡の出土をみた。2面は三角縁神獸鏡で、その一面は箱式石棺、他の一面は組合せ式木棺の副葬品である。五島山、藤崎かいわば集団墓地（群集墳）をなしているのに対し、京ノ隈古墳は前方後円墳という東方からの墓制を採り、独立して築造されている。しかし後方部主体部（削竹形木棺）からの副葬品は鏡を欠いており、先の2墓地に比べ祭祀権の劣ったものと云わざるを得ない。いずれにしろこれらの古墳、墳墓が、平野北部の海岸地帯に造られることは、海上交通に対する示威の表れとみてよい。時期が明確なのは藤崎（4世紀前半から中頃）だけで断定はできないが、3地域の首長がこの時期並立していた可能性を求めてよい

であろう。副葬品と墓地の継続性からすると、3地域の首長が並立しながらも、藤崎に代表される室見川右岸地域が首位に立っていたとも考えられる。また反面福岡、糸島平野にみられる前方後円墳がないことは自立性の弱い証ともいえる。

室見川右岸地域が他の2地域に比べ優位性をもっていたことは、5世紀前後、全長75mの前方後円墳である拝塚古墳がこの地域に築造されたことでも、その一端を窺うことができる。この規模の古墳は同時期の糸島平野の鶴崎古墳（全長62m）、丸隈山古墳（全長84.6m）、福岡平野の老司古墳（全長75m）と比べても遜色のないものであり、ここにまさに自立した平野を統括する首長が誕生したといえよう。主体部は残存していなかったが、割石の出土および時期的な観点からすれば初期横穴式石室としてよいであろう。初期横穴式石室の成立には朝鮮半島の不斷の交渉が前提であり、拝塚の被葬者もこの石室を初めて採用した福岡、糸島の首長層と同等の外交権を持つに至っていたものと考えられる。拝塚にやや遅れる時期、室見川左岸でも桶渡古墳が造営されている。これは弥生時代の桶渡墳丘墓を利用して帆立貝式古墳にしたもので、周溝は櫛状に影響を与えないよう掘られている。この古墳も主体部をすでに失っていたが、割石などの存在から初期横穴式石室であったことが想定される。この古墳の周囲では4世紀から6世紀に亘る大集落跡が発見されている。また陶質土器、初期須恵器などの出土が多く、朝鮮半島との関係が根強くあったことを窺わせる。桶井川流域ではこの時期の有力墳は確認されていない。

拝塚古墳の次に出現するのが今回調査した梅林古墳である。前項で述べたように出土土器からみると5世紀後半の築造と考えられ、拝塚の築造時期とは大きな隔たりがある。拝塚は周溝出土の時期から5世紀中頃まで追葬が行われたとされ、あるいは前方部に後出する主体部をもつた可能性もある。とすればそれから梅林古墳に首長墓の系譜を直接的に迫ることができるかもしれない。しかし同じ前方後円墳とはいえその規模には格段の差があることは否定できない。

6世紀に入った頃から室見川左岸では山麓部に古墳が営まれるようになる。6世紀中頃以降は築造の度合が進み、結果的には400基以上の群集墳の分布となって現れている。7世紀前後には乙石1・2号墳（夫婦塚）という径30mの規模と巨石、巨石室をもった古墳が出現しているが、この古墳に先行する有力墳の系譜は辿りえない。右岸でも2章で述べたように同様の群集墳が西油山周辺に造営される。しかし時期的には6世紀中頃と遅れ、それ以前のものは丘陵部に散在している感がある。梅林古墳に續ぐ有力墳は確認されていない。これに対し桶井川流域では、東油山に群集墳が造営される6世紀中頃から後半の時期に神松寺古墳、柏原A2号墳の2基の小型の前方後円墳が築造されている。時期的には神松寺古墳を梅林古墳の系譜を引いたものと考えてもよいが、立地、規模からして桶井川流域という地域内での首長の系譜を考えた方がよいであろう。群集墳形成の背景のひとつには博多湾周辺の高品位な砂鉄と、半島からの渡来技術者集団を媒介にした鉄生産があげられている。

地域	墳墓名	墳形	全長(径)	主体部	出土遺物	備考	文献
室見川左岸	五島山	円?	不明	箱式石棺	銅鏡、三神二獸鏡2、刀、鏡頭9、勾長2、菅玉2	周辺に箱式石棺あり	1
	轟波	帆立貝	約40m	不明		段築、毒石、埴輪、周溝(柱構あり)	2
	乙石日1号墳 (夫婦塚1号墳)	円	径20m以上	横穴式石室	五鈴鏡、刀、鉄鏡、刀子、鍬、馬具、棺金具、耳環、須恵器、土師器		3
室見川右岸	乙石日2号墳 (夫婦塚2号墳)	円	径30m以上	横穴式石室	刀、鉄鏡、鐵斧、密金具、鋸金具、鑿、鉗具、須恵器、土師器		
	藤崎A1号墳	不明	不明	箱式石棺	三角錐舞龍鏡、素面鏡大刀		4
	藤崎A2号墳	不明	不明	箱式石棺	方格溝文鏡	周圍に石棺	5
	藤崎6号墓	方形周溝	一辺22.5m	組合木棺	三角錐、三神二車馬鏡、素面鏡大刀、鉄鏡、刀子、土師器		
	藤崎7号墓	方形周溝	一辺20.8m	木棺	珠文鏡、刀子、土師器		6
丁隈A3号墳 (千原古墳)	藤崎10号墓	方形周溝	一辺12.5m	木棺	變形文鏡、菅玉		
	丁隈A3号墳 (千原古墳)	円	径24m	箱式石棺	菅玉2、ガラス玉8、土師器		7
	坪塚(灰塚)	前方後円	75m	不明		段築、毒石、埴輪、周溝(陸續あり)	8
梅林	梅林	前方後円	約27m	横穴式石室	鉄鏡、刀子、斧、鉤、馬具、菅玉、ガラス玉、須恵器、土師器	2段築成	9
	七隈6号墳	円	径22m	横穴式石室			10
橘井川流域	京ノ原	前方後方	約40m	調査形木棺	劍、盾、鉛先	葬石? 前方部にも主体部?	11
	神松寺御陵	前方後円	約20m	横穴式石室	刀、鉄鏡、刀子、馬具、耳環、勾玉、丸玉、小玉、須恵器		12
	柏原A2号墳	前方後円	約20~30m	横穴式石室	刀、鉄鏡、弓金具、U字形鉛先、鉛先、斧、刀子、馬具、須恵器、土師器	段築	13

第2表 早良平野の主な古墳

文献

1. 鹿井明徳「福岡市五島山古墳と発見遺物の考察」九州考古学38 1970
2. 下村智・横山邦繼「福岡県周溝古墳」日本考古学年報36 (1983年度版)
3. 塩屋勝利「四箇周辺遺跡調査報告書 (3) 夫婦塚古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980
4. 鳥田寅次郎「藤崎の石棺」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯 1925
5. 中山平次郎「古支那鏡鑑沿革 (二)」考古学雑誌第9巻第3号 1918
6. 漢石哲也・池崎謙二「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982
7. 井澤洋一「千原遺跡」千原遺跡調査会 1985
8. 井澤洋一他(編)「入部I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990
9. 本報告
10. 堀屋勝利他(編)「鳥越・七隈古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第124集 1985
11. 山崎純男「京ノ原遺跡」段谷地所開発株式会社 1976
12. 山崎純男(編)「神松寺遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 1978
13. 山崎純男「柏原遺跡群II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 1986

以上、早良平野の古墳時代の首長墓の動きを素描してきたが、小地域を基盤とした首長存在が認められる。5世紀前後には福岡、糸島平野と溝渠のない首長の存在が拝塚古墳から明かである。しかしその系譜を引くと考えられる梅林古墳は首長墓としても、その権力の縮小、後退は否めない。以後平野を統括する首長墓は見あたらない。磐井の乱以後、早良平野が中央勢力の進出拠点になったことによるものであろうか。外部要因もさることながら、先の3地域の拮抗関係が古墳時代の早良平野の首長層の析出に大きく関与しているものと考えられる。早良平野には他に松浦殿塚、筑紫殿塚など未調査の古墳があり、今後新たに首長墓が発見されない確証もない。また集落、生産址の調査を通して首長層の実態に迫ることも必要であると考えられる。(清石)

注)

1. 那珂川町教育委員会『井河古墳群－氣味都郡那珂川町大字片瀬所在古墳群の調査報告書－』1983
2. 佐田茂(編)『箱池古墳－福岡市南区星形原所在古墳の発掘調査報告－』1983
3. 福岡県教育委員会『九州縱貫自動車道関係埋文化財調査報告 X－給屋郡須恵町所在遠跡群の調査』1977
4. 須恵町教育委員会『乙木木古墳群II－福岡県柏原郡須恵町大字植木所在遠跡の調査－』須恵町文化財調査報告書第2集 1986
5. 柳沢 男『祭穴系横口式石室再考－初期横口式石室の系譜－』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集 上巻』 1982
6. 福岡市教育委員会『重留造跡－重留古墳郡C－2号墳・重留古窯址の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988
7. 甘木市教育委員会『池の上塙墓群』甘木市文化財調査報告第5集 1979
- 甘木市教育委員会『古寺塙墓群』甘木市文化財調査報告第14集 1982 他
これらの墳墓の被葬者は朝鮮半島に関係の深い人々が考えられている。
8. 庄4と同じ
9. 渡辺正氣・松岡史『福岡県京都郡番塚前方後円墳』日本考古学協会第24回総会研究発表要旨1959
10. さらにこの各々の地域の中に、後の郷単位くらいの地域をまとめた有力者の存在がうかがわれる。
11. 第2表中のA1号墳、A2号墳は仮称。ともに方形周溝墓の主体部ではないかと考えている。

梅林古墳の保存と復元工事

柳田 純孝（福岡市教育委員会埋蔵文化財課長）

梅林第一団地は、終戦後の住宅不足を解消する事業の一環として昭和30～31年かけて木造平屋建64戸の市営住宅として建築されたものである。このとき、古墳の位置する小高い丘はそのままとし、丘を取り巻くように住棟が配置されたため旧地形をとどめることになった。

福岡市では昭和46年ごろから平屋建ての市営住宅を低・中層に建替える計画を進めているが、今次の建替え計画は、鉄筋コンクリート4階建て1種5棟64戸、2種3棟48戸の計8棟112戸にするというものであった。

梅林第1団地の建替え工事にともなう発掘調査によって発見された梅林古墳の内容は、本文で報告した。埋蔵文化財課では、古墳の発見にともない平成元年8月2日に記者発表し、合わせて8月6日（日）に現地説明会を開いた。

当初の計画には古墳の位置にも住棟が配置されていたが、建築局では古墳の重要性を認識し住棟計画の見直しを検討した結果、古墳の部分を全面保存して住棟の配置を変更することにした。前方部と古墳西側が道路、東側と南側は住棟に接しているため外周の擁壁は現場打ちとし、その上に高さ1.5メートルのガードフェンスを設置して安全対策としている。しかし、前方部の西側は、道路の南側〔古墳側〕に通学路を兼ねた歩道を設置する計画となっていたため、この歩道にかかる墳丘の一部がカットされることはやむを得なかった。これによって保存されることになった面積は約792.2m²である。

建替え工事は平成2年度に完了し、平成3年度6月ころの入居を予定していることから、入居時に復元した古墳が見学できるような整備が望ましい。建築局では建設省とも協議し、平成2年度事業の一環として古墳の復元整備を図ることになった。埋蔵文化財課では発掘された古墳の復元模式図と現況地形との問題点を調整するため、教育委員会施設部用地計画課に復元の設計を依頼し、建築局にその復元計画案を提示した。この計画案に基づいて予算措置がされ、施設部の設計監督のもとに復元工事が実施された。そして、平成2年12月には工事を終わり、平成3年1月10月に「古墳の復元工事完了」の記者発表となった。

復元にあたって留意したのは、次のような点である。

1. 石室は天井石が失われていた上、横穴式石室の残存壁高が1メートル前後という制約から開口して見学することがむづかしいと考えられたため、真砂土で埋め戻して保存を図った。

2. 後円部の西側はゆるやかな傾斜面となっていたが、公園としての整備を図る観点から墳丘外をフラットに整地し、ここに遺跡説明板を設置した。結果的には、前方後円墳の形状がわかりやすくなる効果をもたらしている。二段築成の墳丘斜面の張芝は10割のコウライ芝とし、

張芝の面積は602m²となった。

3. 見学路の導入部は車止めをし、高低差を解消するため階段を設け、前方部西側および前方部から後円部への見学路は丸太階段を設置している。見学路はクレイ舗装とし、2基のベンチは木製とした。

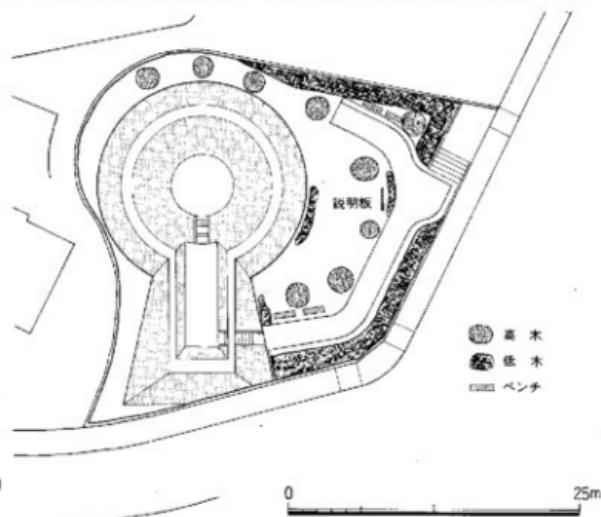
4. 植栽は、墳丘椎部から外周擁壁間と後円部西側に分けられるが、それぞれ高木と低木を配置した。高木としては高さ4メートルのソメイヨシノ、オオシマザクラ、マテバシイを9本、低木はヒラドツツジ、サツキツツジ合わせて465本を密植した。

5. 遺跡説明板は、板面1,800×900mmのアルミ板に和文と英文を併記した説明文をプロセス化したものをスコッチライト貼付し、これに古墳の実測図、古墳の全景・石室・石室の遺物出土状態・出土須恵器の4枚のカラー写真をクロマリン加工したものである。2本の支柱もアルミ製。

6. 外周の擁壁を除いた復元工事の費用は、6,750千円である。

この他、建築局では市営住宅の建築および建替えにあたって從来から花、鳥、動物シリーズ等のレリーフを住棟に配置している。当同地では古墳の発見、保存の経緯から、8棟の住棟裏側に出土品や当時の生活様式をモチーフとしてレリーフを施すことになった。

一方、この梅林古墳について教育委員会文化課では、平成2年度の文化財保護審議会に福岡市史跡指定の答申を予定している。合わせて、保存されることになった792.2m²の面積は文化財保存用地として建築局から教育委員会に所管替えの方針である。さらに、団地にともなう3%の都市公園とは別に、古墳の部分を特殊公園に編入することが検討されている。



梅林古墳整備状況 (1/500)

梅林前方後円墳出土鉄滓の金属学的調査

大澤 正己

概要

5世紀後半から6世紀半ばに比定される梅林前方後円墳から出土した3個の鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

- 〈1〉 鉄滓は、酸性砂鉄（真砂）を木炭でもって還元する時点で排出された製錬滓であった。
- 〈2〉 鉄滓の1つは、製錬炉の炉底に堆積した鉄分の多い滓である。鉱物組成は、マグネタイト(Magnetite:Fe₃O₄)とウエスタイト(Wüstite:FeO)、これにファイヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)から構成される。化学組成は、鉄分が多く全鉄分(Total Fe)が54.7%、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)が3.69%、バナジウム(V)0.33%で、早良区で多くみられる成分系である。
- 〈3〉 残り2個の鉄滓は、金属鉄を多く含んだ含鉄鉄滓であった。金属鉄は酸化を受けてゲーサイト(Goethite: α -FeO·OH)に変じ、鉄分の大部分は酸化第2鉄(Fe₂O₃)となって61.2~72.3%であった。
- 〈4〉 梅林古墳の被葬者は、鉄生産に関与した者と想定され、古墳近くで製錬操業が行なわれていたと考えられる。

1. いきさつ

梅林古墳は、福岡市城南区梅林5丁目の丘陵に所在する全長27m（復元推定値）の前方後円墳である。当古墳の初葬は5世紀後半、追葬の時期は6世紀半ばと推定されて、この時期の何れかに早良区で鉄生産があった事を裏付ける。

早良平野でも操業年代の遅る鉄滓の調査依頼を福岡市教育委員会より要請されたので、鉱物組成と化学組成を中心とする金属学的調査を行なった。

2. 調査方法

2-1 供試材

Table.1に調査に供した試料の履歴を示す。

2-2 調査項目

(1) 肉眼観察

符 号	試 料	出 土 位 置	推 定 年 代	計 測 値		調査項目			
				サ イ ズ (mm)	重 量 (g)	肉 眼 觀 察	顕 微 鏡 観 察	ビ ッ カー ス 断 面 確 度	化 学 组 成
UME-1	尹 沢 淬	A 区東南面 段	5 C 後半 ~ 6 C 半ば	40×52×22	120	○	○	○	○
UME-2	含鉄鉄滓	B 区南面 面トレンチ壁上	〃	27×33×10	15	○	○	—	○
UME-3	〃	C 区南面 フ ラ ク 上	〃	25×44×10	25	○	○	—	○

Table.1 供試材の履歴と調査項目

- (2) 顕微鏡組織
- (3) ピッカース断面硬度
- (4) 化学組成

3. 調査結果

- (1) UME-1、炉底滓

① 肉眼観察

表裏ともに灰黒色を呈し、これに金属鉄を残留していたために赤褐色の錆を発している。人工的に破碎された炉底滓。鉄分が多く破面は緻密である。該品は、金属鉄部分の荒鉄を抽出された残滓である。

② 顕微鏡組織

Photo.1の①～⑤に示す。鉱物組成は、淡茶褐色不定多角形状のマグнетイト (Magnetite:Fe₃O₄) や白色粒状のウスタイト (Wustite:FeO)、このウスタイトからは褐色微小結晶のウルボスビネル (Ulvöspinel:2FeO·TiO₂) が析出する。それに灰色盤状結晶のファイヤライト (Fayalite:2FeO·SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。

①は、組織写真の中央に、砂鉄粒子の還元途中のマグネットイト残留結晶を示している。砂鉄製鍊滓の晶癖である。

③ ピッカース断面硬度

ウスタイト (Wustite:FeO) の鉱物同定を目的として硬度測定を行なった。試験は、鏡面研磨した試料に、136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。Photo.1の⑤の中央に硬度圧痕写真を示した。硬度値は、455 HV、485 HV である。ウスタイトの文献上の硬度値は 450～500 HV であり、白色粒状結晶はウスタイトに同定された。

④ 化学組成

Table.2に示す。該滓は鉄分が多い。全鉄分 (Total Fe) は 54.7% で、そのうち、酸化第1鉄 (FeO) が 57.1%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) が 14.68% の割合である。検鏡でウスタイト (Wustite:FeO) が多量に品出していたのと対応する。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は 18.948% と比較的少ない。

砂鉄特有元素の二酸化チタン (TiO₂) は 3.69%、バナジウム (V) 0.33% は、酸性 (真砂) 砂鉄を原料とした製鍊滓を表わすものである。随伴微量元素は全般的に低目である。酸化マンガン (MnO) 0.30%、酸化クロム (Cr₂O₃) 0.19%、硫黄 (S) 0.043%、五酸化磷 (P₂O₅) 0.018%、銅 (Cu) 0.005% であった。

糸島半島から福岡平野西部一帯で出土する砂鉄製鍊滓の一般傾向を呈するものであった。

- (2) UME-2、UME-3、含鉄鉄滓

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分		酸化第1鉄		酸化第2鉄		酸化鉄素		酸化アルミニウム		酸化マグネシウム	
					(Total Fe)	(FeO)	(Fe ₂ O ₃)	(SiO ₂)	(Al ₂ O ₃)	(CaO)	(MgO)					
UME-1	梅林	A区東南隅遺跡	砂鉄製鐵滓	IC後半-EC末	54.7	57.1	14.68	13.46	3.01	1.22	0.66					
UME-2	〃	C区東南隅裏面 レンガ裏土中	含鉄鉄滓	〃	52.5	1.65	73.2	11.20	4.36	0.07	0.03					
UME-3	〃	C区後遺内フカナ	〃	〃	44.6	2.23	61.2	22.18	5.52	0.08	0.13					

酸化カドミウム	酸化ナトリウム	酸化マンガン	酸化チタン	酸化クロム	砒素	五酸化ホウ	硫酸	バナジウム	鉛	造済成分	造済成分	TiO ₂
(K ₂ O)	(Na ₂ O)	(MnO)	(TiO ₂)	(Cr ₂ O ₃)	(S)	(P ₂ O ₅)	(Cl)	(V)	(Ca)	Total Fe	Total Fe	
0.52	0.078	0.30	3.69	0.19	0.043	0.018	0.06	0.33	0.005	18.948	0.346	0.068
0.015	Nil	0.03	0.12	0.01	0.202	0.026	0.95	0.008	0.003	15.675	0.299	0.002
0.052	Nil	0.01	0.19	0.01	0.142	0.047	0.69	0.003	0.019	27.962	0.627	0.004

Table. 2 鉄滓の化学組成

① 肉眼観察

2 試料共に赤褐色を呈し、木炭痕を有し、亀裂を走らせる小塊。金属鉄を多く含む小鉄塊的鉄滓である。しかし、金属鉄は酸化を受けて磁性は消失している。

② 顕微鏡組織

Photo.1の4、5段目に示す。組織は両方とも金属鉄の酸化したゲーサイト (Goethite: α -FeO·OH) となっている。いざれも低炭素鋼系の金属鉄が存在したと推定される組織であった。

③ 化学組成

Table.2に示す。2 試料共に鉄分が多いが酸化物成分である。全鉄分(Total Fe)は44.6~52.5%、酸化第1鉄(FeO)は、1.65~2.23%と低値で酸化第2鉄(Fe₂O₃)は逆に61.2~73.2と多い。ガラス質成分系の造済成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は15.675~27.962%とこれも少ない。

随伴微量元素らも全般的に少ない。酸化マンガン(MnO)は0.01~0.03%でか底津のUME-1より1桁低く、同じく酸化チタン(TiO₂)は0.12~0.19%、バナジウム(V)0.003~0.008%となる。なお炭素量は汚染物質を含んで0.69~0.95%があるので実質この1/2以下と推定される。

該品らは、金属鉄を多く含むので本来ならば、成分調整の精練鍛冶(大鋳治)を施せば鉄素材となりうる荒鉄の一種と考えられる。

4.まとめ

梅林前方後円墳出土鉄滓は、5世紀後半から6世紀半ばに比定される砂鉄系製鍊滓と含鉄鉄滓であった。供獻鉄滓である。福岡平野の供獻鉄滓としても、古い年代に属し、この時期の鉄生産(製鍊)の傍証資料となりうる。

これら、3個の鉄滓及び含鉄鉄滓は、製鍊滓ではあるが、作業工程としては精練鍛冶(大鋳治)に繋がる。被葬者は製鉄関係者としても、鍛冶関係者としても、鍛冶関係に縁をもつ人物ではなかろうか。副葬品のタガネもこれを示唆すると考えられる。

註) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

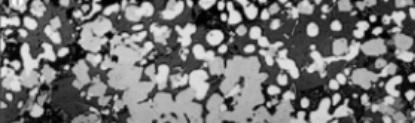
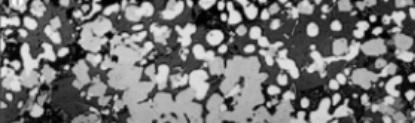
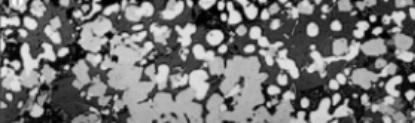
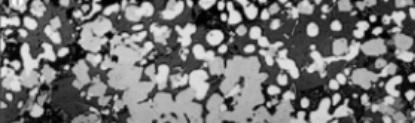
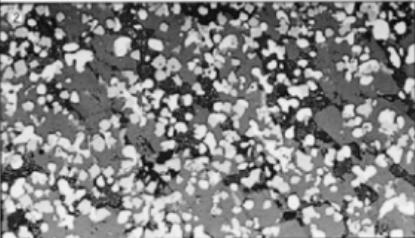
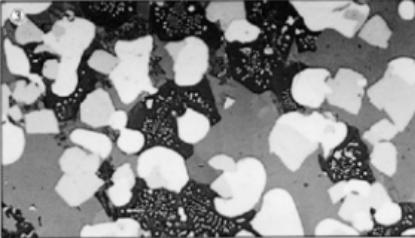
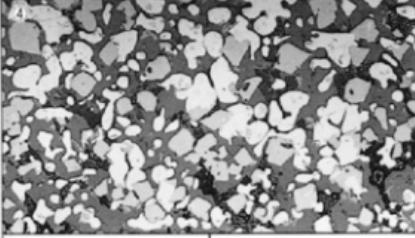
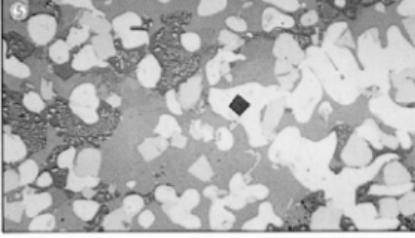
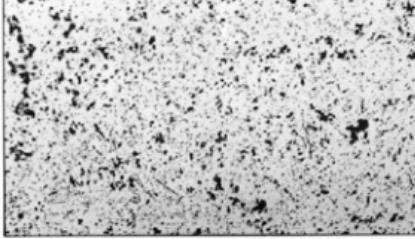
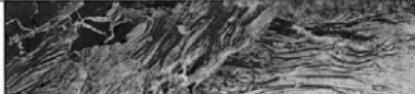
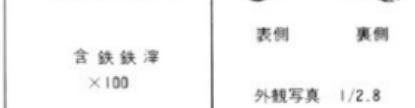
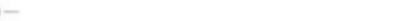
(1) UME-1 梅林古墳 (A区 東南隅段落出土) 砂鉄製鍊滓		<table border="1"> <tr> <td>① 磁物相織 $\times 100$</td><td></td></tr> <tr> <td>② 磁物相織 $\times 100$</td><td></td></tr> <tr> <td>③ 磁物相織 $\times 400$</td><td></td></tr> <tr> <td>④ 磁物相織 $\times 100$</td><td></td></tr> <tr> <td>⑤ 硬度圧痕 $\times 200$ 45HV(100g)</td><td></td></tr> </table> <p>表側 裏側 外観写真 1/2.8</p>	① 磁物相織 $\times 100$		② 磁物相織 $\times 100$		③ 磁物相織 $\times 400$		④ 磁物相織 $\times 100$		⑤ 硬度圧痕 $\times 200$ 45HV(100g)		
① 磁物相織 $\times 100$													
② 磁物相織 $\times 100$													
③ 磁物相織 $\times 400$													
④ 磁物相織 $\times 100$													
⑤ 硬度圧痕 $\times 200$ 45HV(100g)													
													
													
(2) UME-2 梅林古墳 (C区 埋道前面トレンチ 埋土中出土) 含鉄鉄滓 $\times 100$		 <p>表側 裏側 外観写真 1/2.8</p>											
													
													
(3) UME-3 梅林古墳 (C区 埋道内埋土) 含鉄鉄滓 $\times 100$													
													
													

Photo.1 鉄滓、含鉄鉄滓の顕微鏡組織 (87%縮小)

図 版

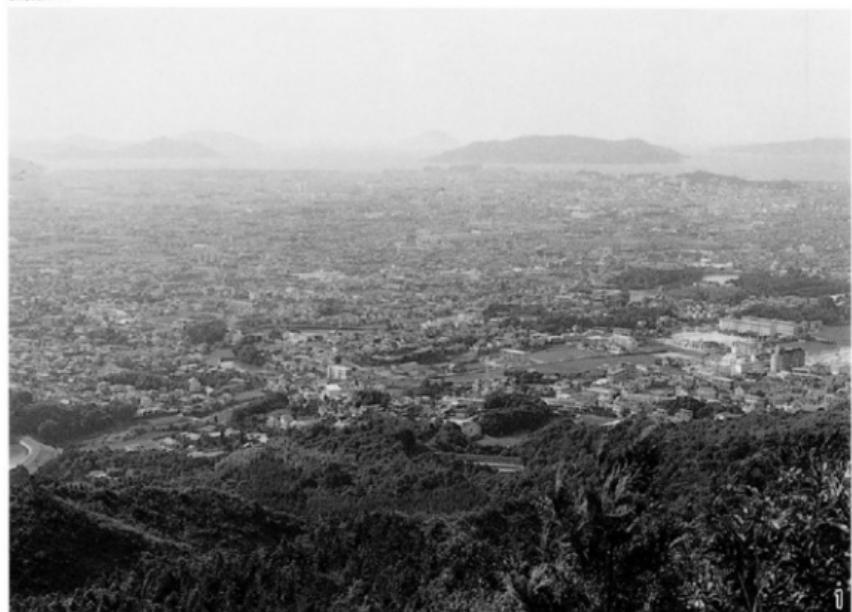


梅林古墳(前方部より油山を望む)



飯倉H遺跡周辺航空写真（1980年頃）

図版2

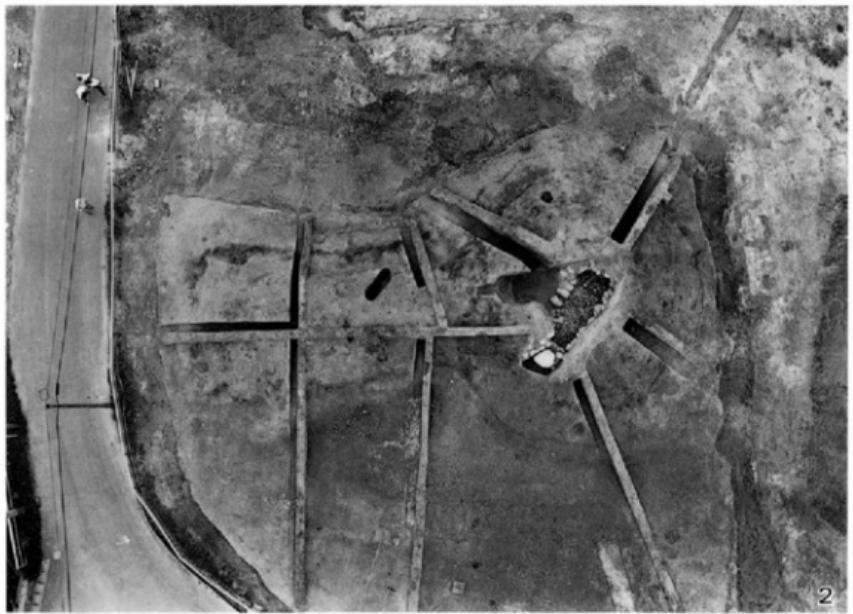


1



2

1. 飯倉H遺跡周辺遠景（西油山から） 2. 梅林古墳調査前状況（東から）



梅林古墳墳丘遺存状況 1 北上空から 2 西上空から

図版 4



1



2

梅林古墳墳丘遺存状況 1 東上空から 2 東から



1



2

1. 梅林古墳西くびれ部（北から） 2. 梅林古墳埴丘土層（Aトレンチ）

図版6



1



2

梅林古墳墳丘遺存状況 1 北上空から 2 西上空から



1



2

1. 梅林古墳石室奥壁 2. 梅林古墳石室玄門

图版8



梅林古境石室墓壁 1 北隅 2 南隅



1



2

1. 梅林古墳石室閉塞 2. 梅林古墳石室前庭

圖版10



1



2

梅林古墳石室遺物出土狀況 1 奧壁部 2 奧壁部鐵斧



1



2

梅林古墳石室遺物出土狀況 1 北袖部 2 北袖部穀金具

図版12

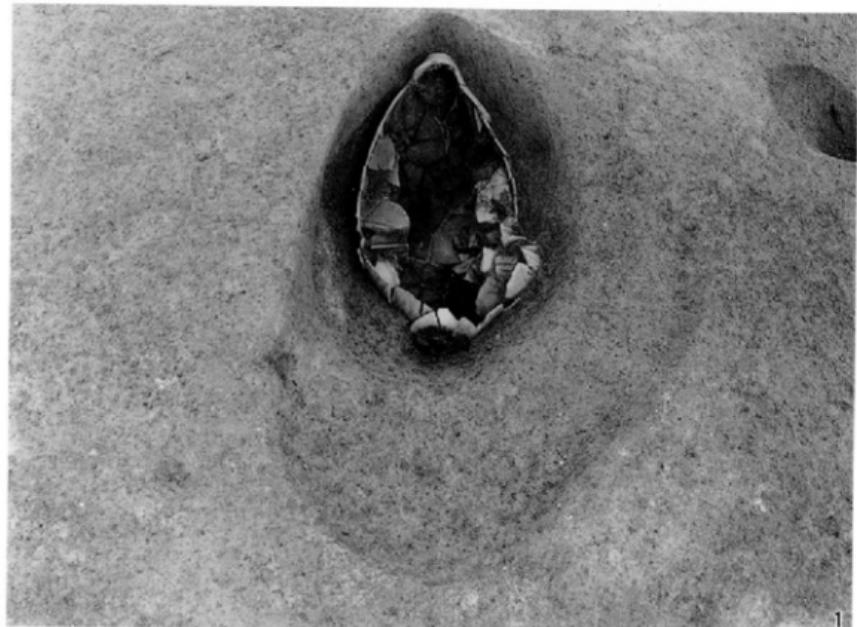


1. A区全景（南から） 2. B区全景（南から）

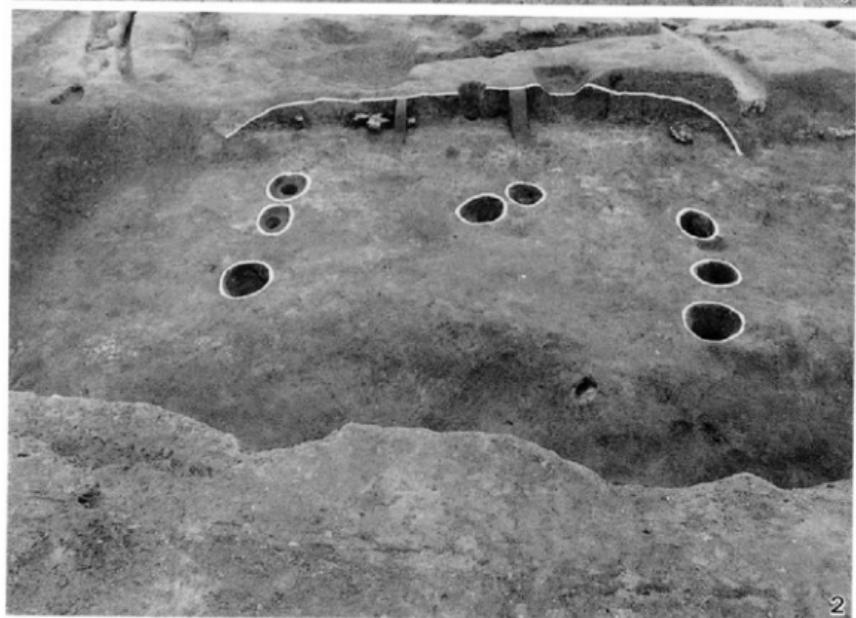


1. A区棗棺墓土状況(南から) 2. A区SX02棗棺墓

图版14

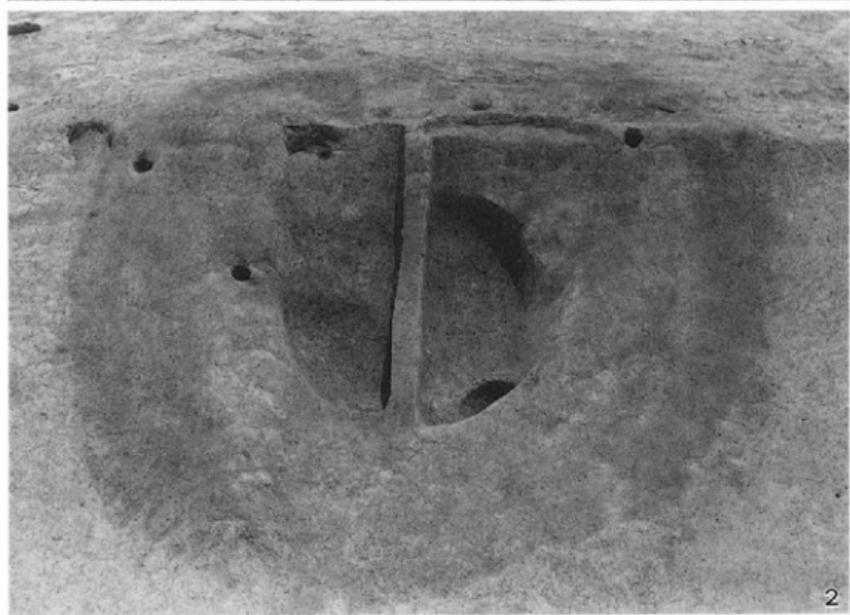


1



2

1. A区SX03**墓** 2. A区SC01**住居跡**



1. B区SK01土坑 2. B区SK02土坑

図版16



1



2



3



4



5



6



7



9



8

出土遺物 I



10



13



11



12



14



15



16

出土遺物Ⅲ



出土遺物 IV



1



2

保存整備された梅林古墳 1 西から 2 南から

福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集
梅林古墳

－市営団地建設に伴う飯倉丘道路の調査－

1991年3月15日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 翠玉川印刷所
福岡市中央区清川3丁目18番11号
